

# 総社愛宕山遺跡

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



## 序

群馬県前橋市は、関東平野の北西端に位置し水と緑に恵まれた人口28万余を擁する県都であります。本市は朝な夕なに赤城山、榛名山を仰ぎ、坂東太郎として名高い利根川や、詩人萩原朔太郎にも謳われた広瀬川の瀬音をきく、「水と緑と詩のまち」として発展している街です。

本市の歴史は大変古く初めてこの地に人々が住み始めたのは、今から2.8万年以上も前の旧石器時代であることが分かっております。また、古墳時代においては、市域東部には国指定史跡大室3二子古墳があり、市域西部には總社古墳群（遠見山・王山・總社二子山・愛宕山・宝塔山・蛇穴山）があります。古墳時代においても、上野国の中心ともいえる文化を築きました。さらに、律令制度の時代においては、元總社町に上野国府が置かれ、山王廃寺・國分寺・國分尼寺が建立され、上野国の中心として位置付けられました。このように、總社愛宕山遺跡が所在する總社町地区は、歴史のあかしとしての史跡、文化財が数多く残されています。

市では、教育文化・商工業の調和のある「豊かで素晴らしい社会を築く街づくり」を進めております。教育環境整備の一環として前橋市立第六中学校の移転新築事業を計画しました。移転先に隣接して、愛宕山古墳が存在し、江戸時代初期に總社藩主秋元氏により開削された天狗岩用水が流れている、まさに、水と緑と文化財に恵まれた地域であります。愛宕山古墳は上野国において首長墳の墳形が前方後円墳から方墳に変わる時期の重要な古墳であります。今回の発掘調査は、愛宕山の周囲の範囲確認調査を実施し、古墳の範囲を確認するとともに、江戸時代に天狗岩用水から分水しようとして開削された女堀の範囲を確認するために実施しました。愛宕山古墳は円墳ではないかといわれていましたが、今回の調査で周堀の形から方墳であることが確認されました。女堀はいわゆる薬研堀りで深さが約5メートルあることが判明しました。貴重な調査資料を得ることができました。これらの貴重な資料をもとに、自然と歴史環境を生かして調和のとれた学校建設を行っていきたいと考えています。

この報告書が、歴史の解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、多大な協力をいただいた前橋市教育委員会総務課、地元の関係者の方々、さらに暑い季節から北風の吹く寒い季節まで発掘調査に参加していただき、また、整理作業に従事していただいた作業員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 大谷輝治

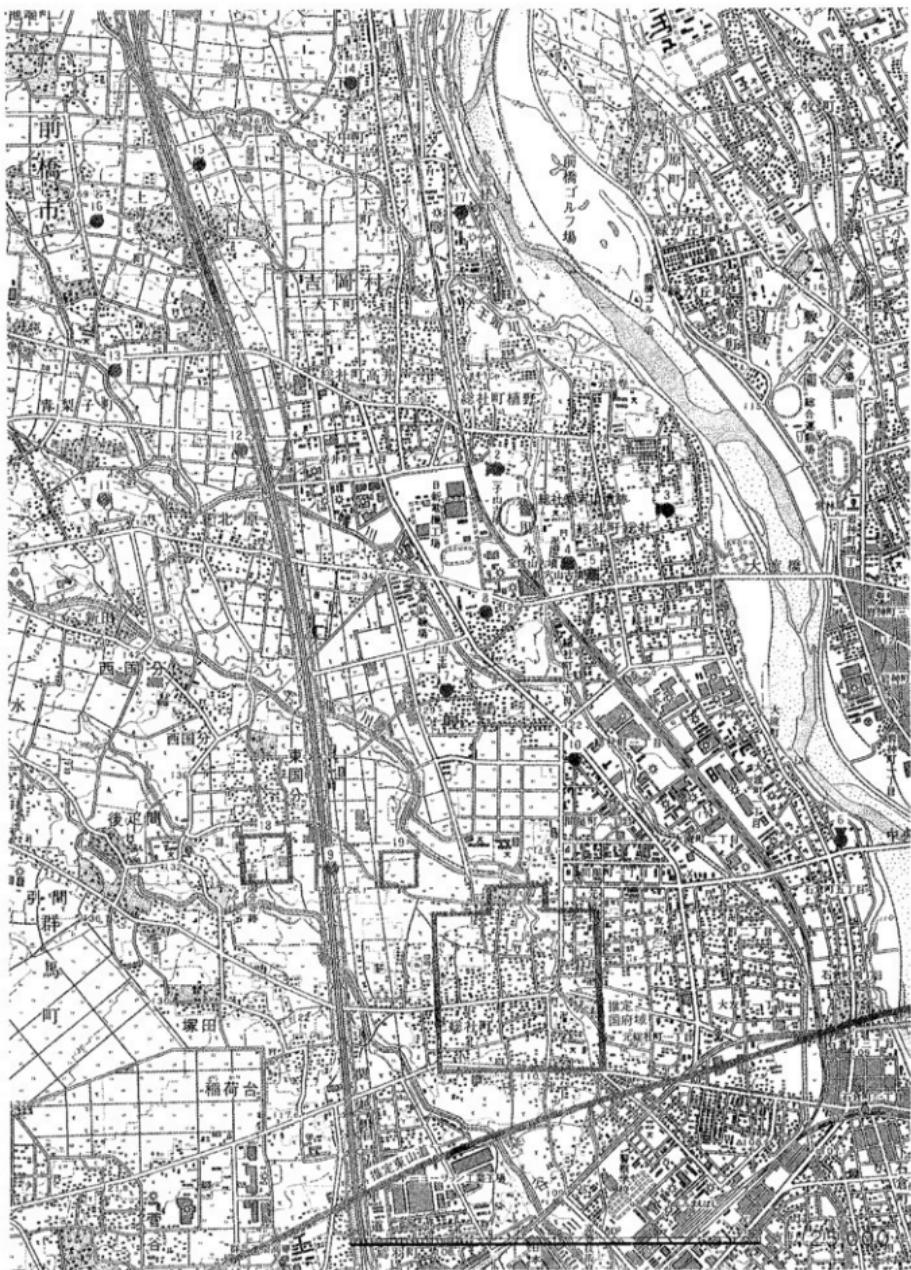


Fig. 2 位置図と周辺遺跡図

奈良・平安時代には、上野国府、国分僧寺<sup>18</sup>・国分尼寺<sup>19</sup>等の建設とあいまって、当地域は古代上野国の政治的・文化的中心地としての様相を呈してくる。

中世には、蒼海城が築かれ(1429年)、長尾氏の城下となったようである。

近世には、秋元氏の城下となり、慶長9年(1604年)には、天狗岩用水が開削された。また、天狗岩用水から分水しようとした女堀が掘られた。

### III 調査の経過

#### 1 調査方針

委託された調査面積は、前橋市立第六中学校移転先の5600m<sup>2</sup>である。調査期間等を考慮して最大の成果を得られるようにトレントを設定し、約1942m<sup>2</sup>の調査を実施した。調査実施に際して、発掘調査範囲の全域をカバーする4mグリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。グリッドの南北方向は、愛宕山古墳の石室の主軸に合わせたため、座標北より西に19度ずれる結果となった。愛宕山古墳の石室の主軸にグリッドの南北方向を合わせたのは、愛宕山古墳の調査に際して、トレント設定が容易になるとえたためである。

実際の調査にあたっては、以下のように実施した。

①土層観察は、原則としてグリッド杭のある側で行い、縮尺1/20で土層図を作成する。

②平面図は縮尺1/20で、等高線間隔は20cmで作成する。

③出土遺物は10cm四方以上のものは縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドット表記した遺物分布図を作成する。また、取り上げに際しては、遺物台帳に諸属性を記録する。

女堀は北東から3A・1・2・3・4・5・6トレントとした。3Aトレントは愛宕山古墳との切り合いを確認するために設定した。そのほかのトレントは愛宕山古墳のトレントと区別するために数字のみのトレント名にした。愛宕山古墳の石室の主軸に直交するトレントを1Aトレントとし、石室の主軸にそった石室の延長上で墳丘の北側を2A、南側を2Bトレントとした。墳丘の北西コーナー部を4A、南西コーナー部を5Aトレントとした。周堀の南側に溝が検出されたため、補助トレントとして、6A・7Aトレントを設定した。

なお、X30・Y20グリッドの公共座標は、第IX系(X=45434.597, Y=-71238.828)である。

#### 2 調査経過

現地での発掘調査は委託契約締結後の9月8日から女堀の調査を開始した。バックフォー(0.4m<sup>3</sup>)と10tクローラーダンプとで表土掘削と廃土の搬出を1トレントから6トレントの順番で行った。11日から作業員による掘り下げを開始した。1・2トレントは、北側に道路が通っており、通行人の安全面を考慮したため、北側は十分な調査ができなかった。通行人の安全面や作業効率、女堀の形態が判明したこと考慮し、女堀の底面までの調査は、3A・2・4・6トレントのみとした。

9月は雨により、女堀が水没することがあり、排水ポンプで水を汲み上げる作業が多く、作業効率がよくなかった。10月からは雨の影響がな

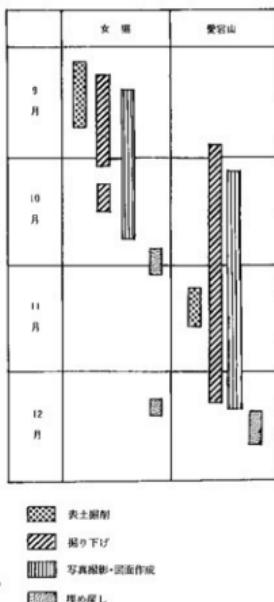


Fig. 3 調査経過図



Fig. 4 周辺図

くなったが、土が乾き過ぎたため、逆に水をまきながらの調査となった。10月12日に気球による女堀の全景写真撮影、10月13日から平面測量を開始した。10月26日から重機による女堀の埋め戻しを開始し、11月2日には3Aトレンチを除いて埋め戻しが終了した。

愛宕山の周堀の範囲確認調査は作業行程を考え、女堀の調査がほぼ終了した9月29日から3Aトレンチから掘り下げを開始した。最初は周堀の深さが判明していないため、表土から手作業による掘り下げとなった。3Aトレンチから調査を進めた。浅間山の火山灰のA s-Bを目安に掘り下げを進めた。3Aトレンチは女堀との切り合いを確認し、女堀の底部まで掘り下げを実施した。女堀は中段まで重機による掘削を実施した。周堀の深さと北側の立ち上がりがほぼ判明したため、2Aトレンチは女堀の落ち際までの調査とした。

4Aトレンチはコーナー部の形を解明するための重要なトレンチであるため、墳丘側から北側にまず2メートル幅で掘り下げを開始した。女堀との切り合い関係が判明したため、2Aトレンチと同様に女堀の落ち際までの調査とした。北側の範囲を確認した後に、西側に2メートル幅で掘り下げを開始し、周堀の西側の立ち上がりを確認した。方墳であるか円墳であるかはっきりしないため、斜め45度で北西コーナーに向けて掘り下げを開始した。周堀の外側の立ち上がりを確認できたため、耕作土は重機による掘削を行い、作業の効率化を図った。

1Aトレンチは古墳の主軸に沿ったトレンチであり、一部墳丘にまで調査を実施した。

2Bトレンチは石室の南側に設定したトレンチであるが、石垣までの調査である。W-4号溝を検出した。

6A・7Aトレンチは、2Bトレンチで検出されたW-4号溝を確認するために設定した。

5Aトレンチは4Aトレンチ同様にコーナー部の周堀の立ち上がりを確認するために設定した。西側と南側と南西方向に幅2メートルで掘り下げを開始した。西側はW-3号溝にA s-B混じりの土が確認され、その外側で立ち上がりになると考えられる。しかし、南側は耕作により立ち上がりは確認できなかつた。また、W-4号溝が検出されたが、古墳が造られた後に掘られたものと考えられる。以上の情報を得てからは、表土掘削を重機により行った。

12月5日にラジコンヘリコプターによる全景写真撮影を実施し、8日に平面測量が終了した。作業員による作業は11日で終了した。現地での作業は22日に重機による埋め戻しで終了した。

遺物整理・報告書の作成は、平成8年3月25日まで実施した。

## IV 層序

本遺跡の標準土層図は、X48-Y48グリッドにおけるボーリング調査により作成した。

I層：暗茶褐色層。耕作土。シルト質砂で、腐植土質。愛宕山周堀遺構面。

II層：灰茶褐色層。砂質シルト。

III層：淡褐色層。シルト混じり細砂層。

IV層：灰色細砂層。シルト分を含み、縮まりがある。女堀底部。

V層：黒褐色腐植土層。臭気が有り、縮まりが無い。

VI層：赤茶褐色軽石層。直徑0.5～2mmの円磨された軽石層。

VII層：淡褐色砂混じりシルト層。縮まりが無く、粘性有り。

VIII層：灰色細砂層。

IX層：灰色砂混じりシルト層。

X層：灰褐色砂礫層。

### 女堀（W-1）層序説明

0層：耕作土。

1層：暗褐色細砂層。耕作土と砂層（黄褐色土）との混土層。

2層：褐色細砂層。砂層（黄褐色土）が1層より多い。

- 3層：にぶい黄褐色微砂層。砂層の黄褐色土がブロック状に入る。  
 4層：暗褐色シルト層。砂層の褐色土がブロック状に入る。  
 5層：黒褐色シルト層。砂層の灰色土主体。  
 6層：オリーブ黑色シルト層。砂層の黄褐色土をわずかに含む。  
 7層：暗オリーブ色シルト層。砂層の褐色土主体。  
 8層：灰オリーブ色シルト層。砂とシルトがラミナ状に入る。  
 9層：暗灰黄色シルト層。黄褐色土と黄灰色土の混じり。

#### W-2号溝層序説明

- A層：暗褐色細砂層。黒褐色土と砂層（灰黃褐色土）の混じり。  
 B層：にぶい黄褐色シルト層。黒褐色土と砂層の混じり。  
 C層：灰黃褐色シルト層。砂層土がブロック状に入る。

#### 愛宕山古墳層序説明

- 1 a層：耕作土。女堀の0層。  
 2 a層：暗褐色細砂層。As-Bをわずかに含む。  
 2 b層：黒褐色粗砂層。As-Bを40~50%含む。  
 2 c層：褐色細砂層。As-Bをわずかに含む。  
 2 d層：黒褐色細砂層。As-Bをわずかに含む。  
 2 e層：青灰色粗砂層。As-B純層。  
 3 a層：黒褐色細砂層。As-C、Hr-FPをわずかに含む。  
 3 b層：暗褐色細砂層。As-C、Hr-FPをわずかに含む。  
 4 a層：褐色細砂層。砂層混じりの褐色土。  
 5 a層：にぶい黄褐色細砂層。Hr-FPをわずかに含む。  
 5 b層：黄褐色細砂層。Hr-FPをわずかに含む。

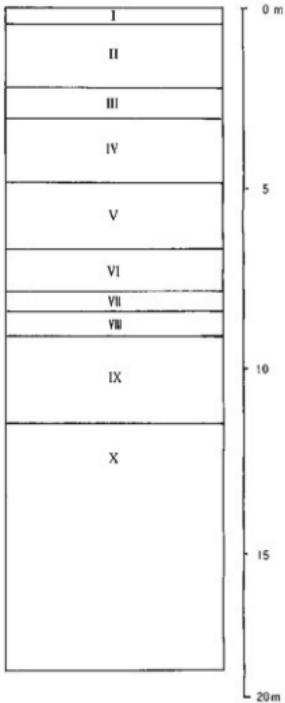


Fig. 5 標準土層図

## V 遺構と遺物

### 1 女堀トレンチ

#### 3 Aトレンチ (Fig.8, PL.8)

(位置) X46・47-Y6~13G (概要) 女堀と愛宕山古墳の周堀との切り合い関係を確認するために設定したトレンチ。北側に道路が通っており、安全面を考慮したため女堀の北側の範囲確認は不十分となった。東西3.92m、南北7.32m、深さ5.16mを調査。一部底面まで調査。(調査面積) 47m<sup>2</sup> (出土遺物) 総数112点が出土。うち繩文土器6点、瓦1点を図示。

#### 1トレンチ (Fig.8, PL.1・4)

(位置) X26~29-Y5~8G (概要) 女堀の北側の範囲を確認するために設定したトレンチ。北側に道路が通っており、安全面を考慮したため北側の範囲確認は不十分となった。東西7.84m、南北9.84m、深さ3.92mを調査。底面まで調査を実施しなかった。(調査面積) 39m<sup>2</sup> (出土遺物) 総数7点が出土。うち瓦1点を図示。

#### 2トレンチ (Fig.8, PL.1・4)

(位置) X16~22-Y3~7G (概要) 北西コーナー部の範囲を確認するために設定したトレンチ。北側に道路

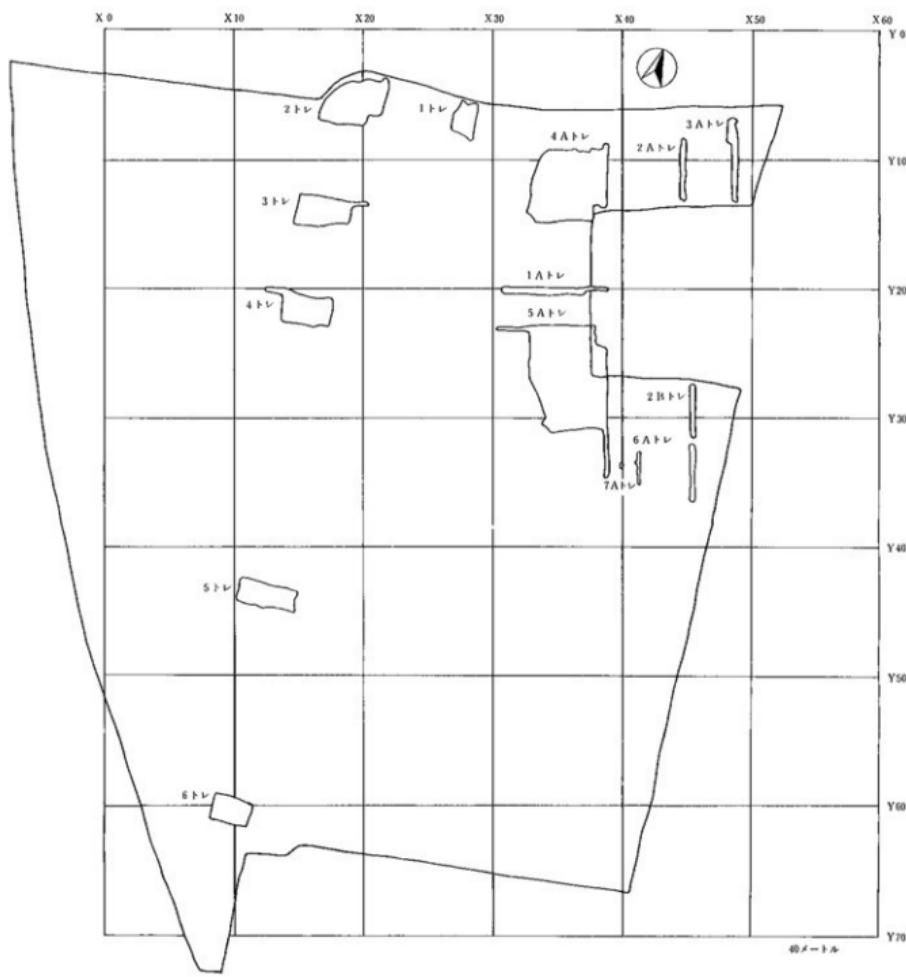


Fig. 6 トレンチ位置図

が通っており、安全面を考慮したため女塀の北側の範囲確認は不十分となった。東西20.88m、南北13.12m、深さ4.40mを調査。一部底面まで調査。W-2号溝を検出。(調査面積) 164m<sup>2</sup> (出土遺物) 総数5点が出土。うち瓦1点を図示。

### 3 トレンチ (Fig.9, PL.2-4-5)

(位置) X14~20-Y12~15G (概要) 校舎建設予定場所の女塀の範囲を確認するために設定したトレンチ。一部東側の掘り方を調査するために延長した。東西21.76m、南北9.36m、深さ4.0mを調査。(調査面積) 125m<sup>2</sup> (出

土遺物) 総数2点が出土。うち火輪1点を図示。五輪塔の火輪が出土。火輪は安山岩製で、高さ12.8cm、最大幅20.4cmを測る。

#### 4 トレンチ (Fig.9, PL.2・5)

(位置) X 12～17-Y 20～22G (概要) 校舎建設予定場所の女壠の範囲を確認するために設定したトレンチ。一部西側まで掘り方を調査するために延長した。東西18.40m、南北10.56m、深さ6.0mを調査。(調査面積) 110m<sup>2</sup> (出土遺物) 総数9点が出土。

#### 5 トレンチ (Fig.10, PL.3・5)

(位置) X 10～14-Y 40～42G (概要) 遺跡の中央部付近の女壠の範囲を確認するために設定したトレンチ。東西15.44m、南北9.04m、深さ5.40mを調査。(調査面積) 87m<sup>2</sup> (出土遺物) なし。

#### 6 トレンチ (Fig.10, PL.3・5)

(位置) X 8～11-Y 59～61G (概要) 遺跡の最南端の女壠の範囲を確認するために設定したトレンチ。東西11.76m、南北9.68m、深さ4.16mを調査。(調査面積) 76m<sup>2</sup> (出土遺物) 総数4点が出土。

## 2 女壠出土遺物

女壠の覆土の中からは縄文土器片が403点出土している。加曾利E式の土器がほとんどである。女壠が埋められる時に混入したものである。復元できる遺物がないのは残念である。また、五輪塔の火輪や、土師器片、須恵器片、陶器片、瓦片、埴輪片も出土しているが、縄文時代の遺物から近世までの遺物が含まれているため、女壠の開削された時代を決定する遺物はなく、女壠が埋め戻される時に混入した遺物であると考えられる。

## 3 W-2号溝

(位置) X 17-Y 4～6 G。女壠の2トレンチの西側壁部分で南北方向に検出。(形状) 断面は逆台形。長さ7.94m、幅0.72m、深さ0.46mを調査。(覆土) 総社砂層を主体とする。水が流れた形跡はなく、壁はあまり固くない。(備考) 3トレンチでは検出していなかったため全容は不明。

## 4 愛宕山古墳トレンチ

### 1 Aトレンチ (Fig.11・12, PL.7)

(位置) X 30～38-Y 20G (概要) 古墳の主軸に直交して古墳の西側の範囲を確認するために設定したトレンチ。周堀の外側の立ち上がりは緩やかであるが、検出できた。墳丘と周堀の境界ははっきりとは判明しないが、緩やかな立ち上がりを持つものと考えられる。墳丘の中段部分まで調査のトレンチを入れた。墳丘から戦後農地解放の開墾に伴う葺石を再利用した石垣が検出された。東西32.08m、南北2.08m、深さ3.20mを調査。(石の出土状態) 周堀内は30cm大の大きめの石がやや密に出土する。墳丘側は石垣の裏込め石(拳大)が密に出土。(調査面積) 50m<sup>2</sup> (出土遺物) 総数52点が出土。

### 2 Aトレンチ (Fig.11・12, PL.7)

(位置) X 45-Y 8～13G (概要) 古墳の主軸に設定して北側の範囲を確認するために設定したトレンチ。女壠との切り合い関係を確認した。便宜的に北側をAトレンチとした。墳丘側は、戦後農地解放の開墾に伴う葺石を再利用した石垣がある。周堀の覆土の下位にA s-Bの純層を検出した。A s-Bの覆土の下から石が検出でき



Fig. 7 總社愛宕山古墳全体図 (原図:右島和夫氏提供)

た。東西2.0m、南北19.20m、深さ1.68mを調査。(石の出土状態)周堀内は大きめの石がやや密に出土する。トレンチの西側に南北7個、東西3列のしっかりとした石列を検出。ほぼ水平に組まれている。(調査面積)33m<sup>2</sup>(出土遺物)総数174点が出土。うち縄文土器11点を図示。

#### 2 Bトレンチ (Fig.11・12, PL.7・8)

(位置) X45-Y27~36G (概要) 古墳の主軸に設定して南側の範囲を確認するために設定したトレンチ。古墳の石室の南側にある。墳丘側は、戦後農地解放の開墾に伴う葺石を再利用した石垣がある。道路が通っているために一部調査ができなかった。トレンチの南端に石列を検出したが、覆土から古墳時代より新しいものといえる。東西2.16m、南北35.04m、深さ1.52mを調査。W-4号溝を検出。(石の出土状態)墳丘側の周堀内にややまばらに出土する。(調査面積) 53m<sup>2</sup> (出土遺物) 総数36点が出土。うち縄文土器1点と石器1点を図示。

#### 3 Aトレンチ (Fig.8・12, PL.4・8)

(位置) X46・47-Y6~13G (概要) 古墳の主軸に直交して古墳の北側の範囲と女堀との切り合い関係を確認するために設定したトレンチ。東西1.80m、南北18.60m、深さ1.92mを調査。墳丘側は、戦後農地解放の開墾に伴う葺石を再利用した石垣がある。周堀の覆土の下位にA s-Bの純層を検出した。(女堀との切り合い) A s-Bを含む覆土からすると、周堀の外側の立ち上がりを検出した。しかし、周堀の立ち上がりの上端は耕作によりはっきりとはしない。(石の出土状態) A s-Bの覆土の中から石を検出できた。周堀内は墳丘側にやや密に出土する。(調査面積) 47m<sup>2</sup> (女堀含む) (出土遺物) 総数112点 (女堀含む) が出土。うち埴輪1点を図示。

#### 4 Aトレンチ (Fig.13・14, PL.8・9)

(位置) X32~38-Y9~14G (概要) 古墳の北西コーナー部の範囲確認のために設定したトレンチ。東西25.28m、南北24.24m、深さ2.20mを調査。墳丘側は、戦後農地解放の開墾に伴う葺石を再利用した石垣がある。(石の出土状態) A s-Bの覆土の下から石を検出できた。墳丘西側は密に出土する。西側の一部はしっかりと石を組んでいる。北側はまばらに出土する。(調査面積) 476m<sup>2</sup> (出土遺物) 総数506点が出土。うち埴輪6点、縄文土器10点、石器3点、瓦1点を図示。

#### 5 Aトレンチ (Fig.14・15, PL.10・11)

(位置) X30~38-Y23~34G (概要) 古墳の南西コーナー部の範囲確認のために設定したトレンチ。東西34.08m、南北45.92m、深さ1.60mを調査。墳丘側は、戦後農地解放の開墾に伴う葺石を再利用した石垣がある。(石の出土状態) 墳丘側に密な所とまばらに出土する場所がある。(調査面積) 675m<sup>2</sup> (出土遺物) 総数177点が出土。うち埴輪2点、縄文土器3点、石器3点、瓦1点を図示。

#### 6 Aトレンチ (Fig.15, PL.11)

(位置) X41-Y32~35G (概要) 古墳の周堀の南側に検出された溝W-5号の範囲を確認するために設定した補助トレンチ。東西1.04m、南北10.4m、深さ0.80mを調査。(調査面積) 6 m<sup>2</sup> (出土遺物) 総数3点が出土。

#### 7 Aトレンチ (Fig.15)

(位置) X39・40-Y33G (概要) 古墳の周堀の南側に検出された溝W-5号の範囲を確認するために設定した補助トレンチ。東西0.56m、南北1.52m、深さ0.82mを調査。(調査面積) 0.7m<sup>2</sup> (出土遺物) なし。

## 5 愛宕山古墳の周堀

愛宕山古墳の周堀は外側の立ち上がりの状態から方形であることが確認できたと言える。古墳の北側の3 A・

2 A・4 Aトレンチの周堀の外側の立ち上がりから復元想定ラインはほぼ直線的になる。周堀断面の形は、船底のような形をしており、底面はほぼ水平に近いように掘られていた。

周堀の内側の立ち上がりは、石垣によりはっきりしない。葺石の根石が検出された訳ではないが、周堀の掘り方で角度が変化したのは、3 AトレンチのY12とY13ラインの中間あたりで確認された。Y12ラインの周辺に石が多く検出され、A s-B混じりの土も切れている。

2 BトレンチのY12ラインの北側には、古墳を造った当時のものかはっきりしないが、南北2列、東西2~3列の石が水平に置かれていた。A s-Bの火山灰層の下から検出されているので、A s-B降下以前のものであるといえる。トレンチの西壁よりも西に伸びているため、全容は不明である。

周堀の外側に2つ目の堀がある可能性が指摘されていたが、試掘や古墳の外側に伸ばした5 A・1 A・4 Aトレンチで確認したが、2つ目の堀は検出できなかった。

## 6 愛宕山古墳の葺石

葺石の大きさは拳大から40cm大の河原石であり、利根川から運んできたものである。葺石は後世、畑として開墾された時に、天狗岩用水に投げ込まれたり、古墳の墳丘下段部に現在見られる石垣として再利用されている。西側の表面には石垣が見られなかったが、墳丘の中段まで掘り下げた結果、西側でも石垣が確認された。石垣の墳丘側には、裏込めとして拳大の石が密に検出された。

## 7 愛宕山古墳の出土遺物

今回の調査では愛宕山古墳の造られた時期を決定できる遺物は検出できなかった。復元できる遺物もなく、破片のみの出土であった。覆土の中から埴輪片が出土したが、埴輪は6世紀後半のものと考えられ、想定されている愛宕山古墳の築造年代より古い時代のものである。愛宕山古墳の周堀が埋まる時に混入したものと考えられる。北西に總社二子山古墳があるが、埴輪は破片であるため、類似性の比較は難しい。墳丘部分からも埴輪片が出土しているが、表面に近い所からの出土であり、明治時代以降の瓦片も同じ覆土から出土しているため、後世に混入したものと考えられる。4 Aトレンチの周堀の底からは、土師器片が出土しているが、愛宕山古墳の時代より古い4世紀代のものである。また、縄文時代の石器も出土しており、周堀が埋まる時に混入したものと考えられる。

## 8 W-3・4・5号溝

### W-3号溝 (Fig.15, PL.11)

(位置) X34-Y23~31G。古墳の周堀の西側に検出された溝。(重複) W-4号溝に切られる。(形状) 断面は逆台形。長さ31.76m、幅0.84m、深さ0.24mを発掘調査。(覆土) A s-B混じりの褐色土。

### W-4号溝 (Fig.11-15, PL.11)

(位置) X34~45-Y30~31G。(重複) W-3号溝を切る。(形状) 断面は逆台形。長さ18.64m、幅1.08m、深さ0.38mを発掘調査。(覆土) A s-Bをわずかに含む暗褐色土。

### W-5号溝 (Fig.15, PL.11)

(位置) X39~41-Y33G。(形状) 断面は逆台形。長さ1.56m、幅0.54m、深さ0.26mを発掘調査。(覆土) A s-C、H r-F Pをわずかに含む黄褐色土。

## VI まとめ

### 1 女堀

今回の調査では、3 A・2・4・6 トレンチのみ女堀の底面まで掘り下げた。堀の形状はいわゆる薺研掘りである。底面の高さは126.11~125.41mであり、天狗岩用水に近い3 Aから6 トレンチまでわずかながら下がっている。女堀の深さからすると周辺の水田に水を引くには深すぎるため、下流域への用水として掘られたものと考えられる。しかし、遺跡地の南側は開発により現状では判断がつかない。また、明治時代の地図（明治18年測量迅速図）や、昭和16年に作成された地図（皇紀2601、群馬郡總社町全図）の地割りを調べても、女堀は確認できない。遺跡地内の女堀の部分は小道として記されている。女堀の地名が残る地域が山王地区に残っているが、女堀については、どこまで掘られているのかははっきりしない。現在の上越線を越えてから南西方向に掘られていると思われる。

女堀は、天狗岩用水から分水しようとして掘られた5つの堀のうちの1つである。新井哲夫氏によると、5つの堀とは、①五千石用水②新田町から元景寺入り口をとおり總社城の堀へ注ぐ用水③女堀④現在の前橋市立第六中学校体育館の西、墓地南（光嚴寺旧境）から東へ分水し、栗島の竹やぶから南流し城川となる灌漑用水⑤出口の木戸から南木戸に向かう水路である。しかし、五千石用水以外は水が流れなかつたためすぐに埋められてしまったという古文書が總社町の福島家に残っている。

現在の地形からは、どこに堀が掘られていたかは判別できない。女堀は古文書に書かれているとおり、水が流れた形跡はなく、掘り返された總社砂層が埋めもどされていた。古文書の内容を裏付けることができた。砂層であるため、岸が崩れ川底が流されてしまったため、取水できなかつたようである。

天狗岩用水の西壁は木が生い茂り、ほぼ垂直になっているために、現状では女堀が天狗岩用水とつながっていたかは確認できなかつた。今後、天狗岩用水の護岸工事が予定されているとのことで、その工事の際に女堀が天狗岩用水につながっていたか確認できるのではないかと考える。

天狗岩用水と五千石用水は總社城の防衛のための外堀の機能を兼ねていたといわれている。女堀も總社城の防御を考えると、すぐに埋め戻されることはなかつたと思われる。今回の調査では、開削されてから埋め戻されるまでどの程度の期間があったかははっきりしない。女堀については、今後の調査や研究に負うところが多い。

Tab.1 女堀計測表

単位：m

	①上面幅	②中段幅	③底面幅	④上面標高	⑤中段標高	⑥底面標高
3 A トレ	6.22	1.42	1.11	130.32	127.75	126.11
1 トレ	7.61	2.56	—	130.36	128.14	—
2 トレ	7.75	1.31	0.34	130.19	127.72	125.85
3 トレ	7.64	1.41	—	130.13	127.50	—
4 トレ	7.82	1.92	0.63	129.49	127.48	125.42
5 トレ	6.95	1.93	—	128.35	126.72	—
6 トレ	7.52	1.68	0.50	128.06	126.51	125.41

### 2 愛宕山古墳

愛宕山古墳は、總社古墳群のなかで7世紀初頭に造られ、首長墳の墳形が前方後円墳から方墳に変わる時期の古墳であり、当時の上野国の社会変化をとらえる意味で重要な古墳である。昭和10年調査の『上毛古墳綜覧』によると、愛宕山古墳は大きさ180尺、高さ26尺の円墳として記されている。右島和夫氏が『群馬県史研究第28号』において、愛宕山古墳の墳丘測量を実施し、方墳であることを指摘している。今回の調査で、古墳の墳丘部分の発掘調査は一部のみしか行えなかつたが、周堀の外側の復元想定ラインからはあきらかに方形であることがいえる。

今回の調査で周堀の外側の立ち上がりは、A s-B を含む土を基にしてとらえると、3 A・2 B・1 A・4 A

トレンチで確認することができた。また、北側の周堀の立ち上がりは女堀とは切り合っていないで、女堀は周堀にそって掘られていることが確認できた。X45-Y20ポイントを古墳の中心としてとらえると、北側の古墳の兆域の推定長は、3 Aトレンチでは中心から約46.2m、2 Aトレンチでは約42.6mとなる。また、西側の古墳の兆域の推定長は、4 Aトレンチでは中心から約47.0m、1 Aトレンチでは約46.6m、5 Aトレンチでは44.6mとなる。南側は耕作によりはっきりとした古墳の兆域の推定長はわからなかった。中心から同じ規模で造られたと推定すると、古墳の南北長は約92m、東西長約94mとなる。西側の4 A・1 Aトレンチは、周堀の外側はなだらかに立ち上がっていた。5 Aトレンチの周堀の外側の立ち上がりはW-3号溝が掘られており、その溝の覆土には、浅間山の噴火による火山灰（A s-B）が含まれていた。北側の周堀の底部はA s-Bを含む土の下部で判断したため、溝の外側を立ち上がりととらえた。しかし、W-3号溝が周堀の立ち上がりとすると、4 A・1 Aトレンチからは、溝が検出されていない。W-3号溝は、古墳を造る時の施工の違いなのか、古墳とは違う時期に掘られたものなのか、不明である。

南側は後世の耕作により、周堀の立ち上がりははっきりとはしなかった。5 Aトレンチと1 Bトレンチからは、W-4号溝が検出されたが、覆土から後世に掘られた溝と考えられる。このW-4号溝は、W-3号溝を切っていることからも新しい溝といえる。しかし、古墳の中心をX45-Y20ポイントとすると、北側の復元想定ラインから折り返してみると、W-4号溝の位置に南側の復元想定ラインがくる。新しい溝であるが、現在の地割りからとらえてもW-4号溝の南側は道が東西方向に通っている。Y31ラインあたりが、古墳の範囲として区別されていたのかもしれない。

W-5号溝は覆土から古墳とは直接関係ないと思われる。しかし、調査期間・残土置き場等の関係で、W-3号溝とW-5号溝が接しているのか、接していないのか、切り合い関係を確認できなかったのが残念である。

愛宕山古墳と同時期の大型方墳で、千葉県の割見塚古墳や野々間古墳は2重の堀を持つ。割見塚古墳や野々間古墳は周堤部の高まりがあり、堀がはっきりと周堤部で区別されていた。愛宕山古墳は周堤部の高まりを検出できなかった。愛宕山古墳の堀は1つであると考えられる。

愛宕山古墳は首長墳の墳形が前方後円墳から方墳に変わる時期の古墳であり、また、石室内にある家形石棺は群馬県内でも非常に珍しく、県内では4例が確認されているにすぎない。愛宕山古墳に続く、宝塔山古墳、蛇穴山古墳も方墳であり、大型方墳が3基続く。上野国と中央政権との係わりをとらえる上で重要な位置を占める古墳であるといえる。總社二子山古墳が造られる時期は、上野国には、總社二子山古墳と同規模の勢力を持つ豪族が県内に存在したことが各地に残る古墳から窺える。しかし、愛宕山古墳が造られる時期になると、県内には、愛宕山古墳に匹敵する古墳がみあたらない。このことは、總社古墳群を造っていた豪族が、中央政権の力を利用しながら、あるいは中央政権が豪族を利用しながら上野国をまとめあげたことが窺える。總社古墳群の南西には、国分僧寺・國分尼寺が建立され、國府が置かれたことからも窺える。

3基の方墳の現状での規模は以下のとおりである。愛宕山古墳は、墳丘長は、一辺約56m、高さ8.5mを測る。宝塔山古墳は、東辺54.5m・西辺51.2m・南辺49m・北辺42.2m、高さ11m、周堀は開発に伴うトレンチ調査によると南側で約20mを測ると推定される。蛇穴山古墳は南北長39.1m・東西43.4m、高さ5m、周堀は現在の地割りや開発に伴うトレンチ調査で12m前後を測ると推定される。

周堀の外側の立ち上がりから方墳であることが確認されたが、墳丘と周堀の境界や、墳丘の規模等の課題は残る。今後の研究や調査に負うところである。

#### 参考文献

群馬県史 通史編Ⅰ 1990

新井信夫「總社町歴史散歩（2）」群馬歴史散歩 1973

尾崎喜左雄・川合功・中村富夫「群馬總社古墳群」観光資源保護財界 1977

小沢洋「二間塚遺跡群確認調査報告書Ⅰ・II」富津市教育委員会・財団法人君津郡市文化財センター 1984・1985

右島和夫「總社愛宕山古墳の墳丘・石室測量調査」群馬県史研究第28号 1988

右島和夫「東国古墳時代の研究」1994

Tab. 2 繩文土器観察表

番号	出土位置	①胎土②焼成③色調 ④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備 考
1	W-1・2A	①細粒②極良③にぶい赤褐④口縁	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 3
2	W-1・3A	①中粒②良好③灰黄褐 ④胴部	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 3
3	W-1・3A	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	微隆起。縄文(R L)。	加曾利E 4
4	W-1・2A	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 3
5	W-1・2A	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 3かE 4
6	W-1・4A	①中粒②良好③灰黄褐 ④胴部	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 3
7	W-1・4A	①細粒②良好③灰褐 ④胴部	微隆起。縄文(R L)。	加曾利E 4
8	W-1・3A	①中粒②良好③明黄褐 ④胴部	沈線。縄文(R L)。渦巻き沈線。	称名寺
9	W-1・4A	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 3
10	W-1・2A	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 3
11	W-1・3A	①細粒②良好③にぶい黄褐④胴部	沈線。縄文(R L)。接合帯に刻み有り。	加曾利E 4
12	W-1・2A	①中粒②良好③褐 ④口縁	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 4
13	W-1・2A	①細粒②良好③にぶい橙 ④胴部	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 4
14	W-1・3A	①細粒②良好③にぶい褐 ④胴部	微隆起。縄文(R L)。	加曾利E 3かE 4
15	W-1・2A	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	沈線。縄文(R L)。隆帶。	加曾利E 3
16	M-1・4A	①中粒②良好③にぶい黄褐④胴部	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 4
17	M-1・4A	①中粒②良好③明褐 ④胴部	沈線。	加曾利E 4
18	M-1・4A	①細粒②良好③にぶい橙 ④胴部	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 4
19	M-1・2A	①細粒②良好③明褐 ④口縁	沈線。	加曾利E 4
20	試 燒	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部	隆帶。沈線。	加曾利E 3
21	M-1・4A	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	微隆起。沈線。	加曾利E 3
22	M-1・4A	①中粒②良好③明赤褐 ④胴部	隆帶。沈線。縄文(R L)。	加曾利E 3
23	M-1・5A	①中粒②良好③明褐 ④口縁	下地に縄文(R L)。浮線文。	諸磲 b
24	W-1・3A	①中粒②良好③にぶい褐 ④口縁	微隆起。縄文(R L)。	加曾利E 4
25	M-1・2B	①中粒②良好③明褐 ④胴部	縄文(R L)。縦維。0段多条の縄文R Lが羽状構成。	黒浜
26	M-1・5A	①中粒②良好③にぶい橙 ④口縁	縄文(L)。口縁部に無文帶。	加曾利E 4
27	M-1・4A	①細粒②良好③橙 ④胴部	沈線。縄文(R L)。	加曾利E 3
28	M-1・2A	①中粒②良好③橙 ④胴部	縄文(R L)。	加曾利E 3かE 4
29	M-1・5A	①中粒②良好③にぶい黄橙④突起	Uの字形に幅1.5cmの沈線。	加曾利E 3
30	M-1・4A	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	浮線文。	諸磲 b
31	M-1・2A	①中粒②良好③にぶい黄褐④胴部	条線。	加曾利E 3かE 4
32	M-1・2A	①中粒②良好③にぶい橙 ④把手	沈線。	加曾利E 3

注) 表の記載は以下の基準で行った。

①胎土は、細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm以下)、粗粒(2.0mm以上)とした。

②焼成は、極良、良好、不良の三段階。

③色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖(小山・竹原 1995)によった。

④残存は、ほとんどが小片のため、所属部位を記載した。



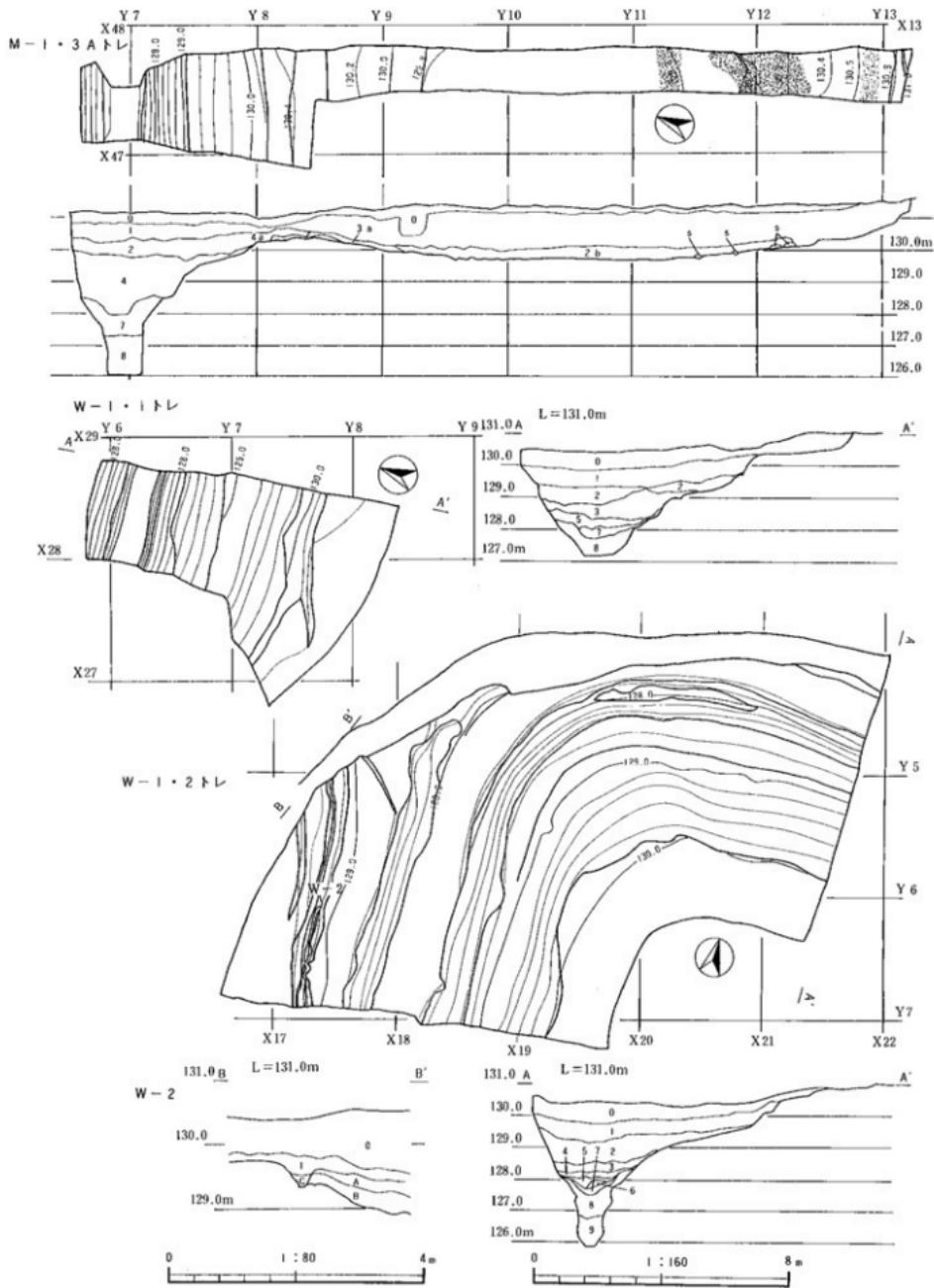


Fig. 8 愛宕山古墳 3 A トレス, 女塚 1・2 トレス, W-2 号倉

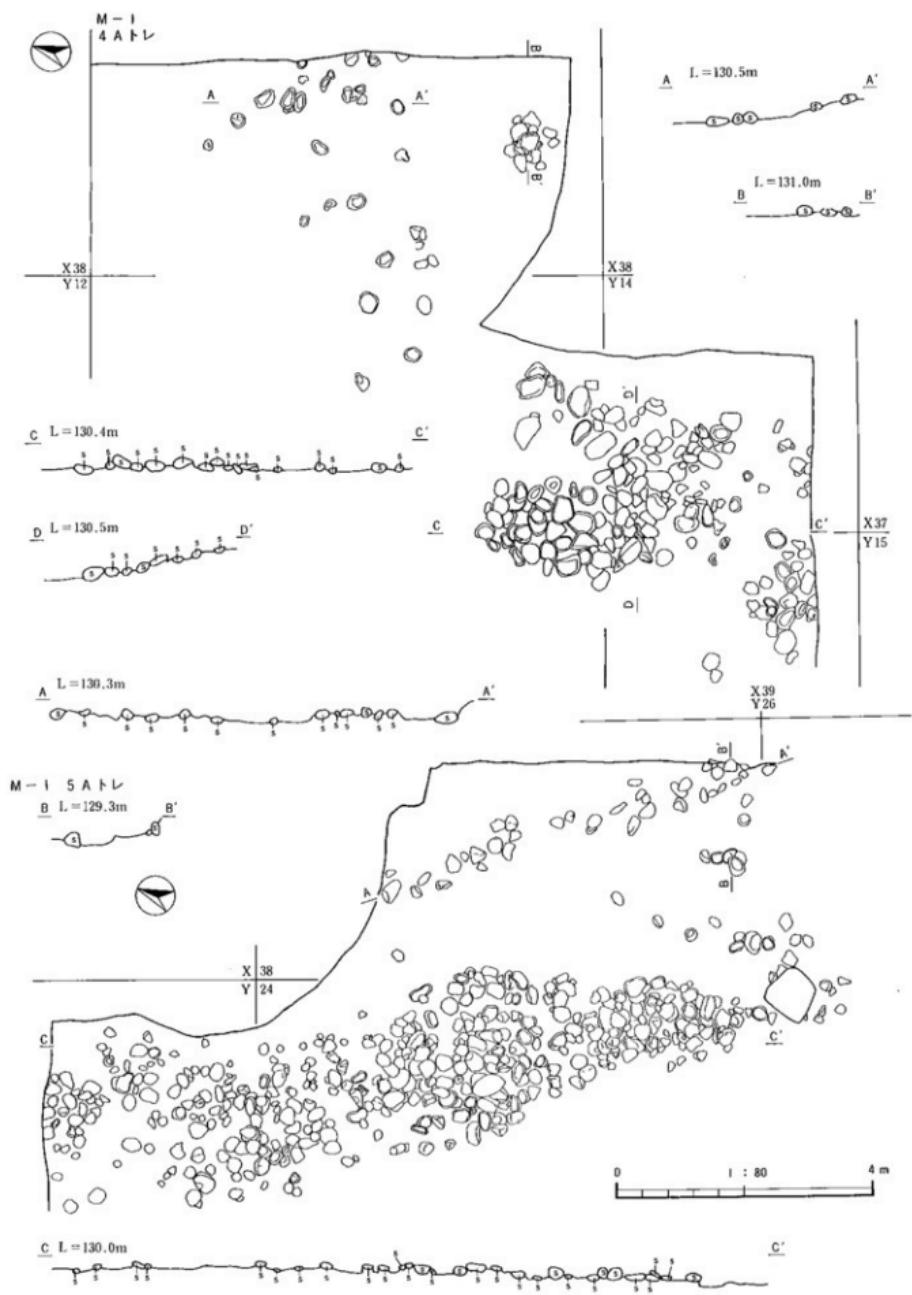


Fig.14 愛宕山古墳 4 A・5 A トレの墓石

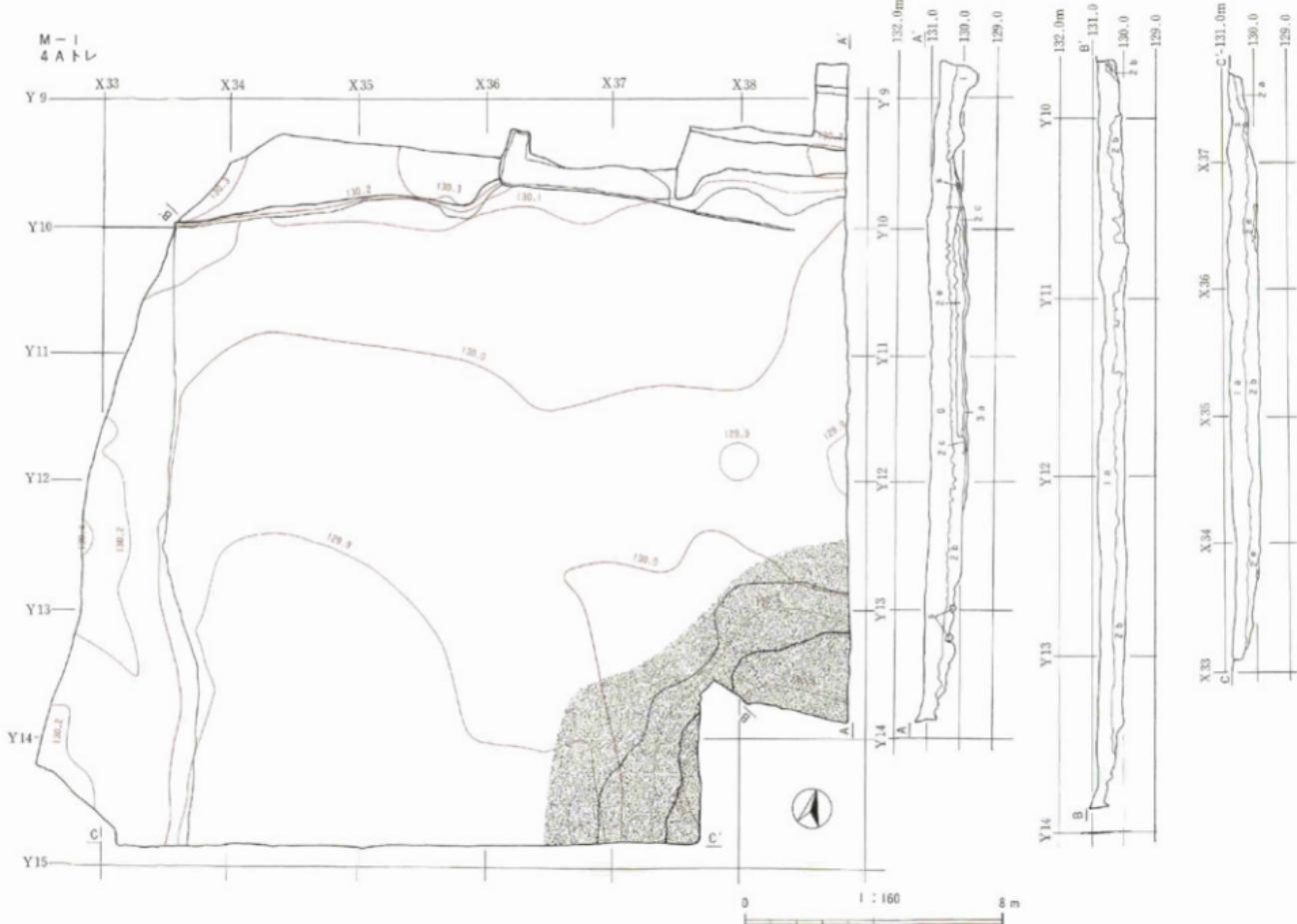
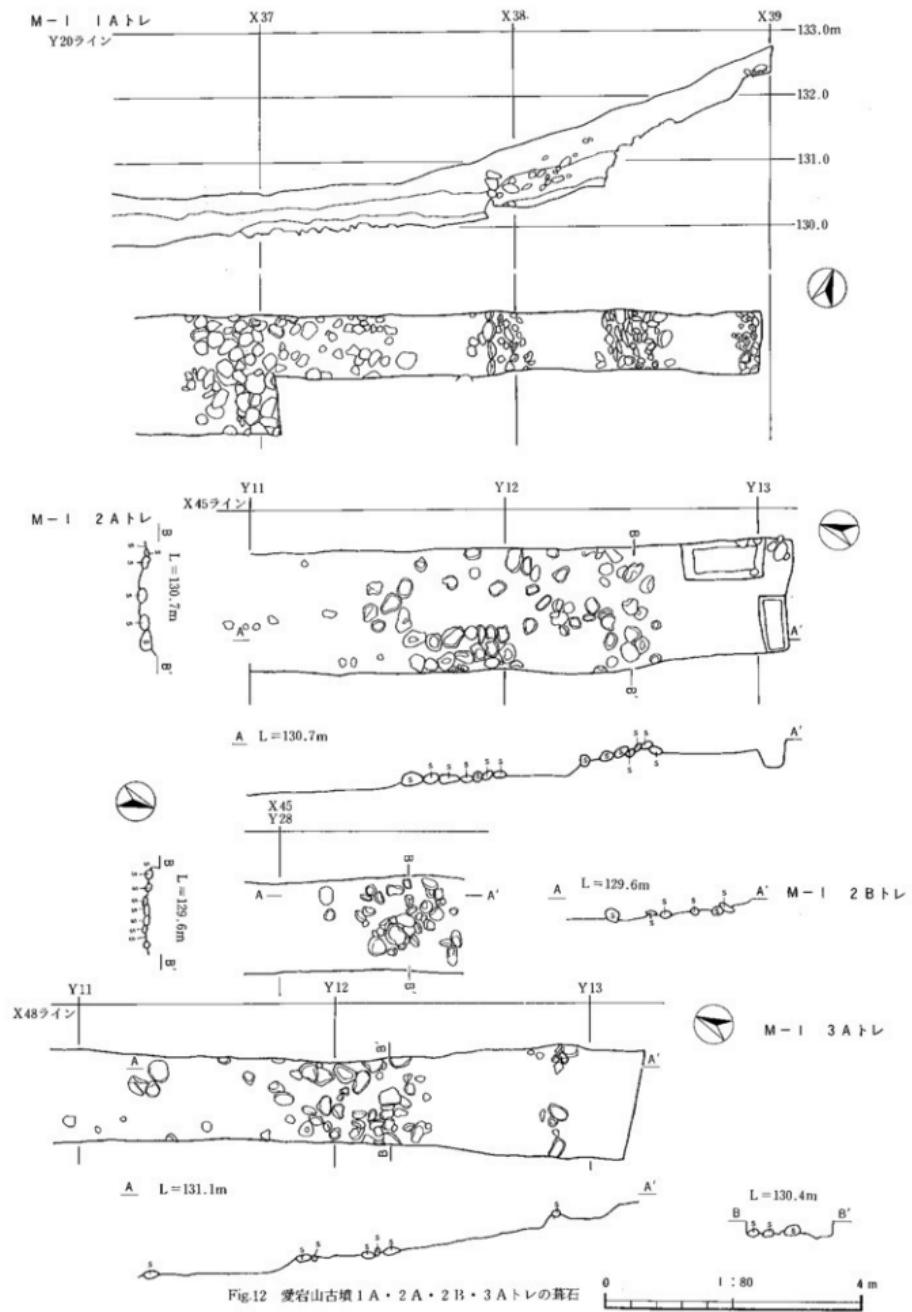
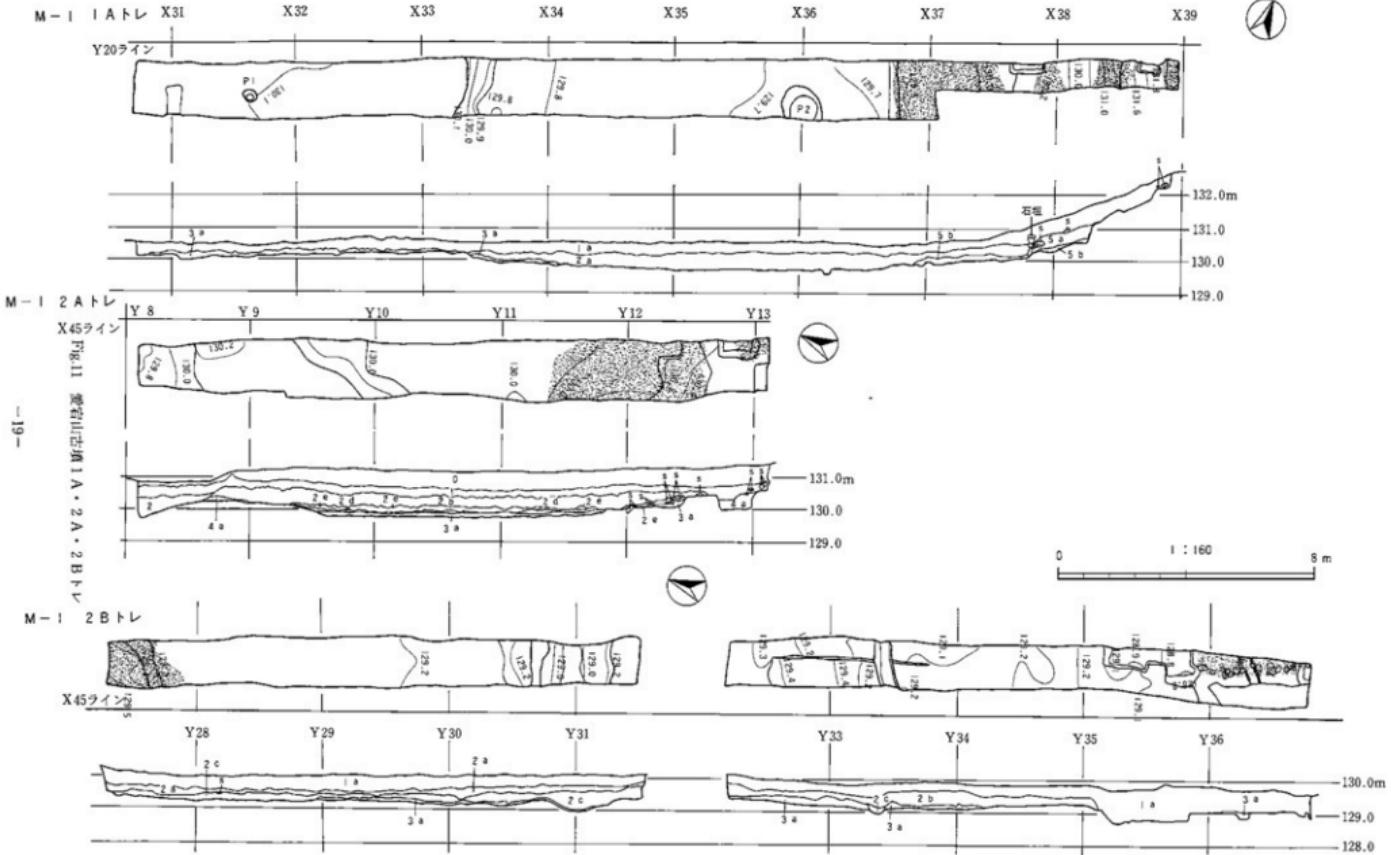


Fig.13 愛宕山古墳 4 A トレ





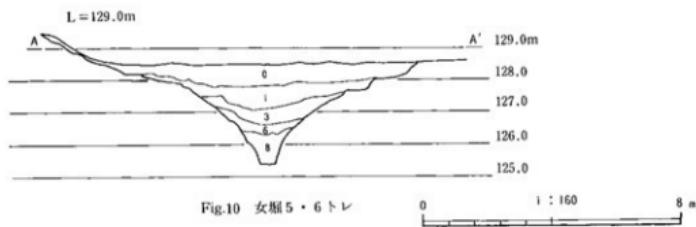
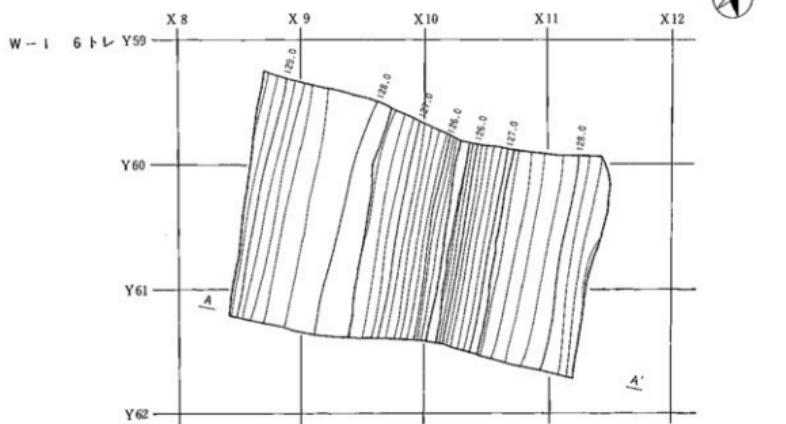
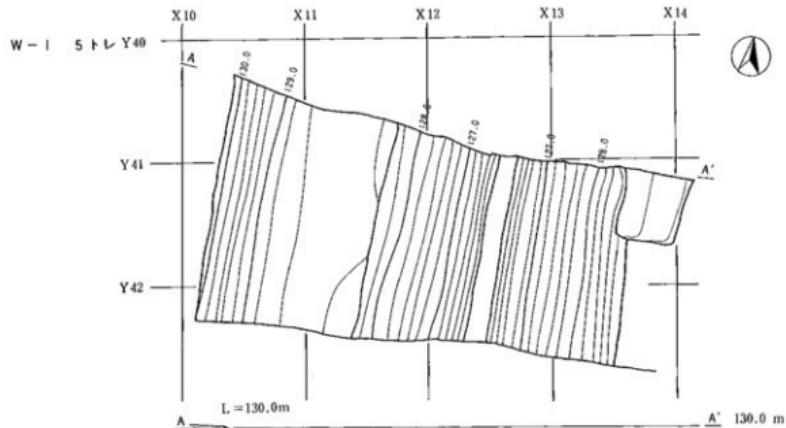


Fig.10 女塚5・6トレ

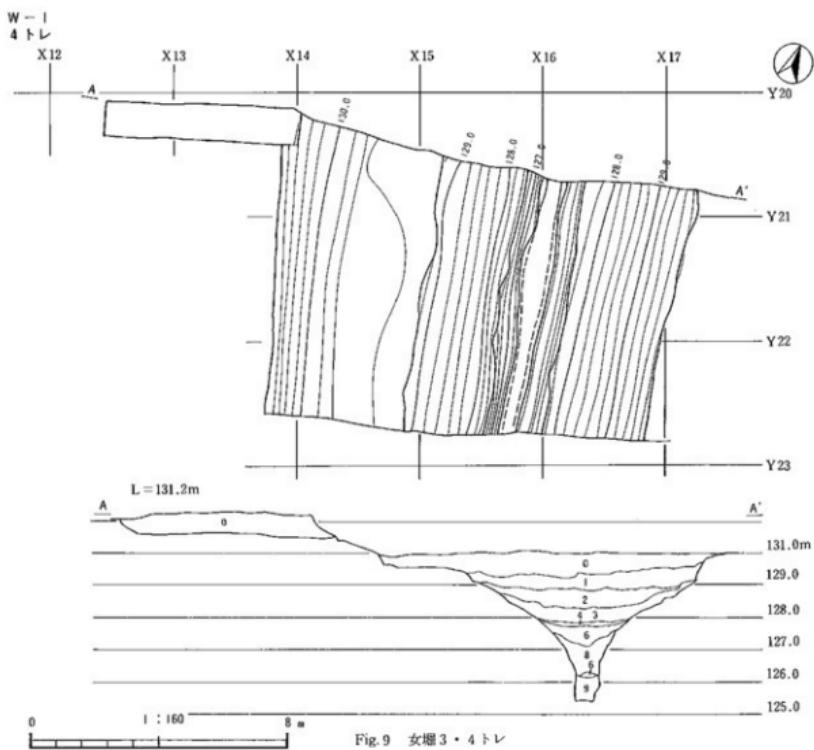
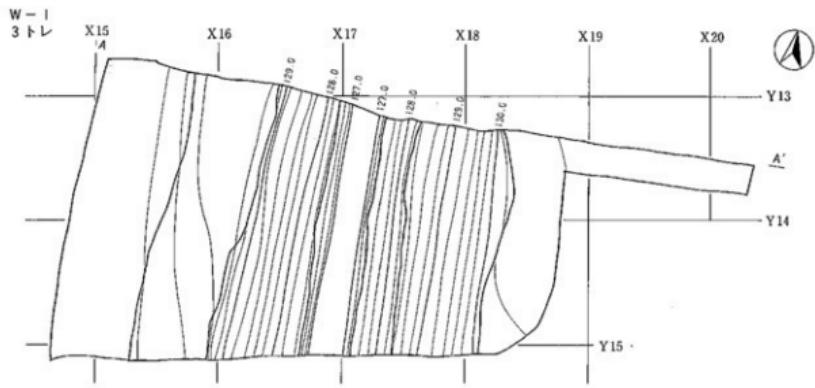


Fig. 9 女塙 3・4 トレ

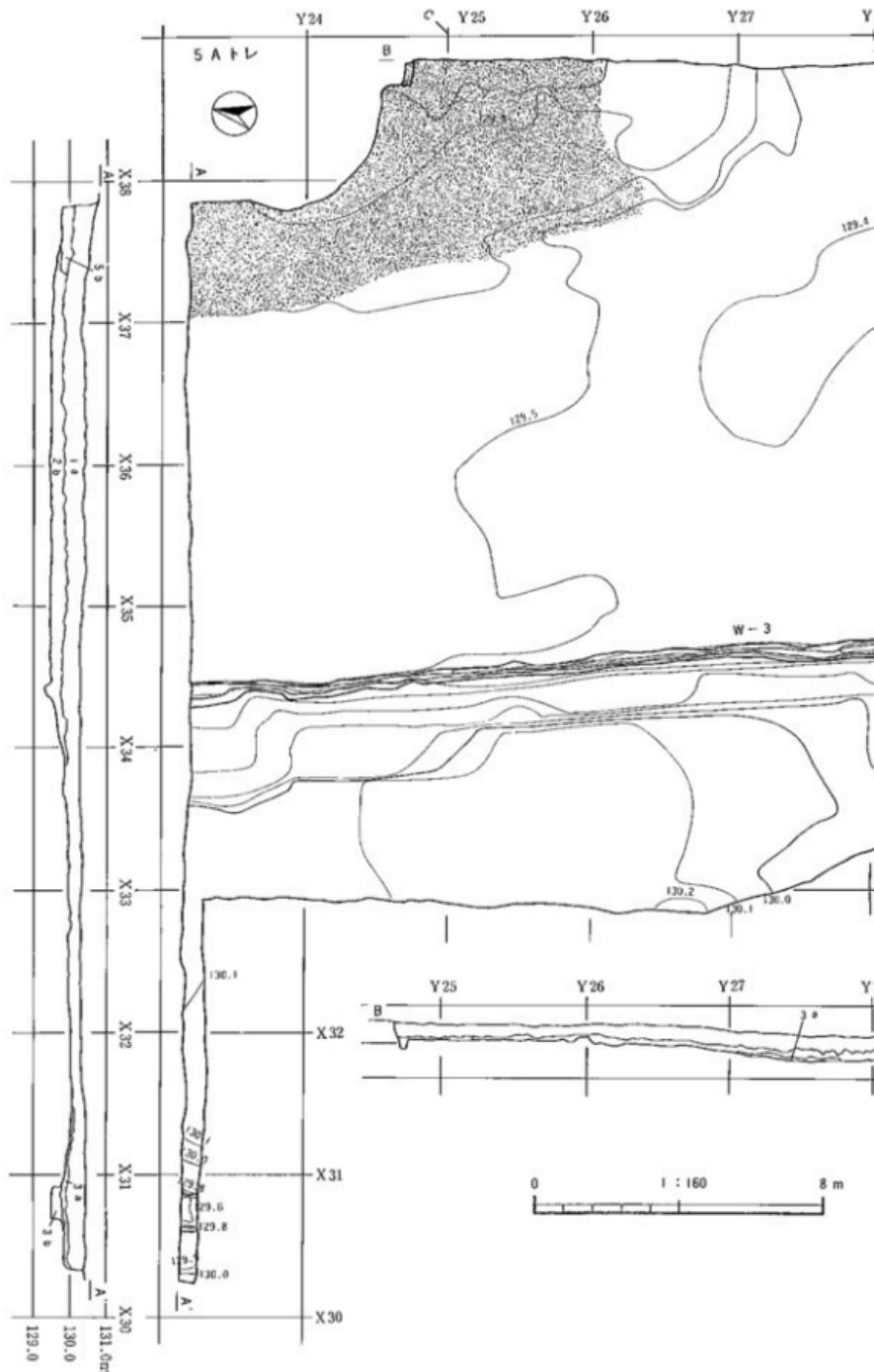
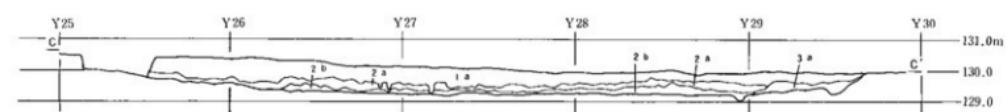
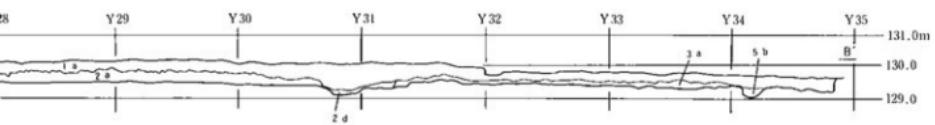
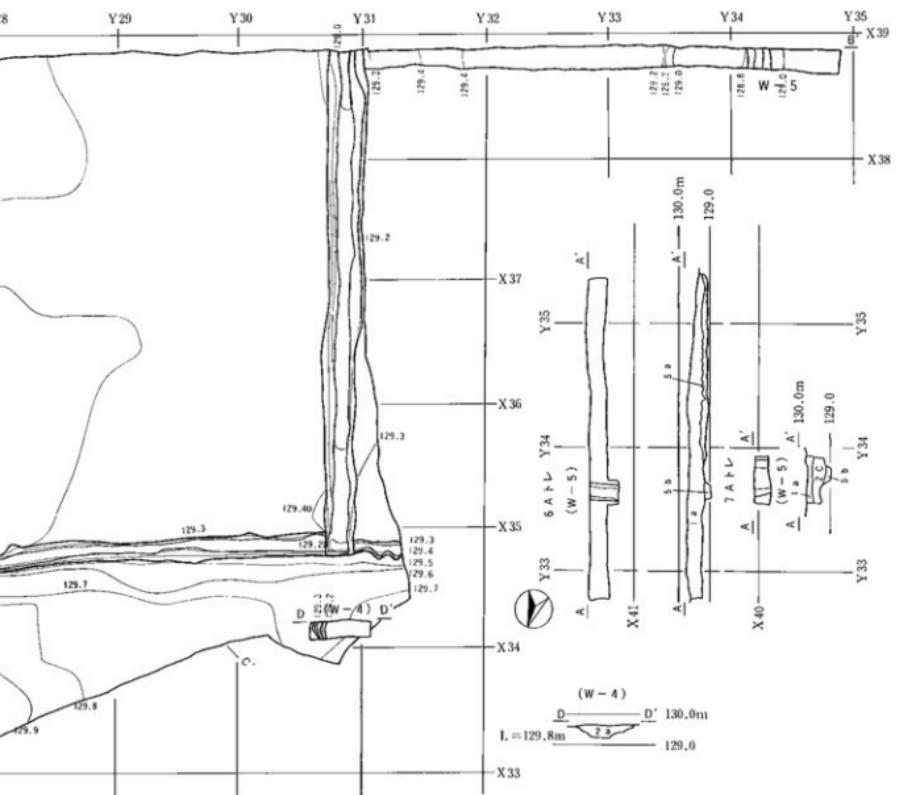


Fig.15



芙蓉山古墓 5 A • 6 A • 7 A ト V, W - 3 • 4 • 5 号溝

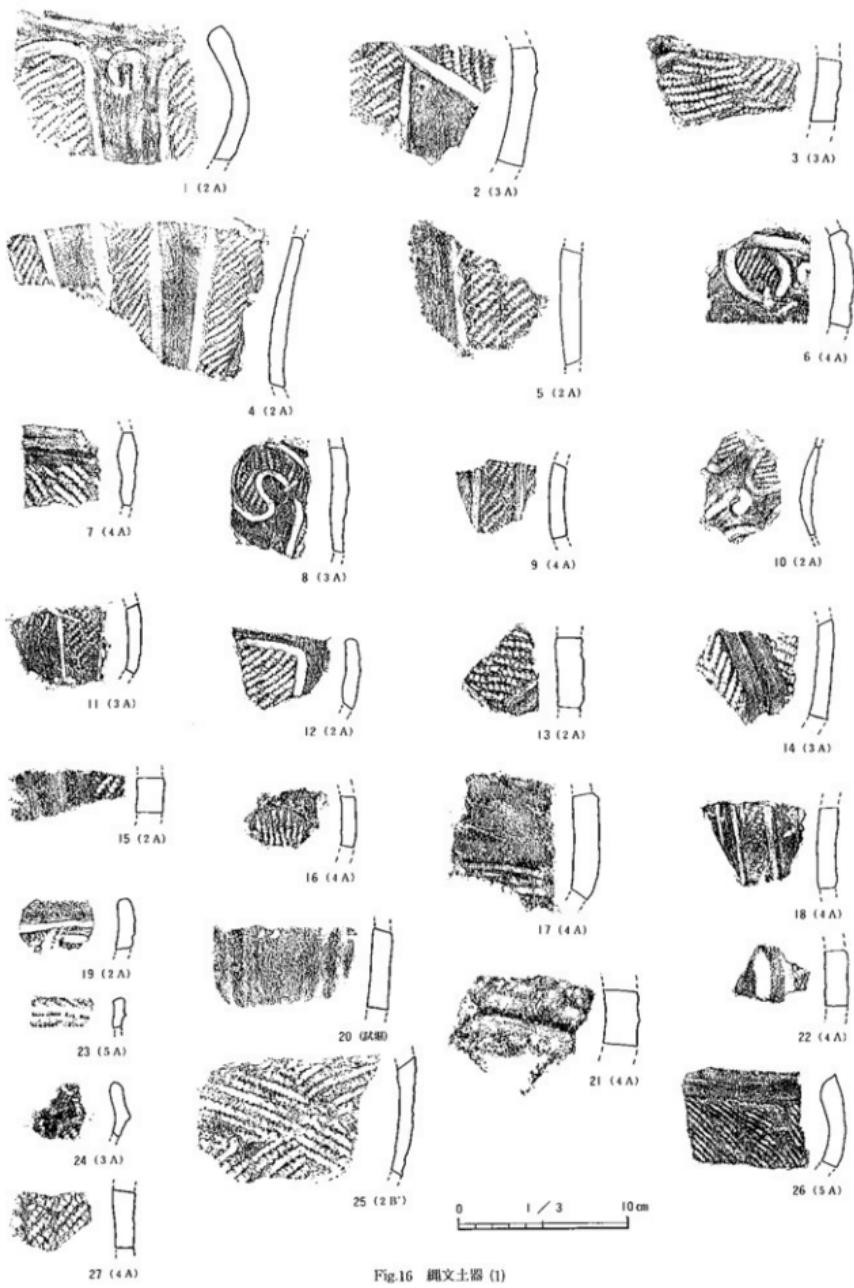


Fig.16 繪文土器 (I)

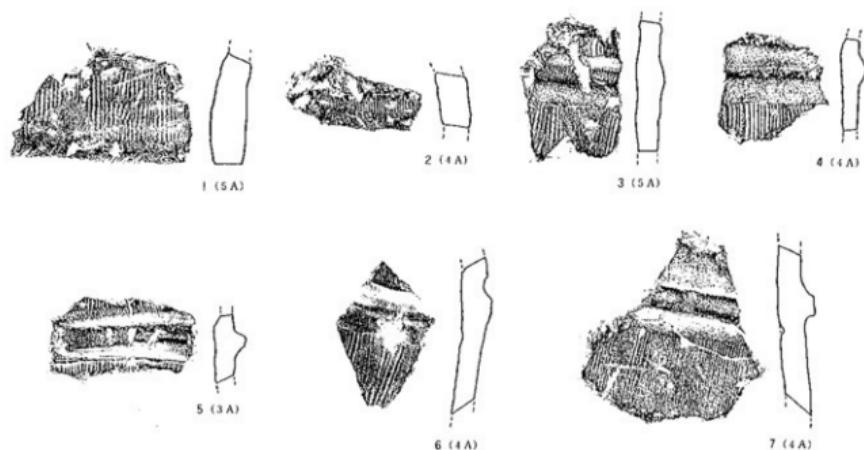
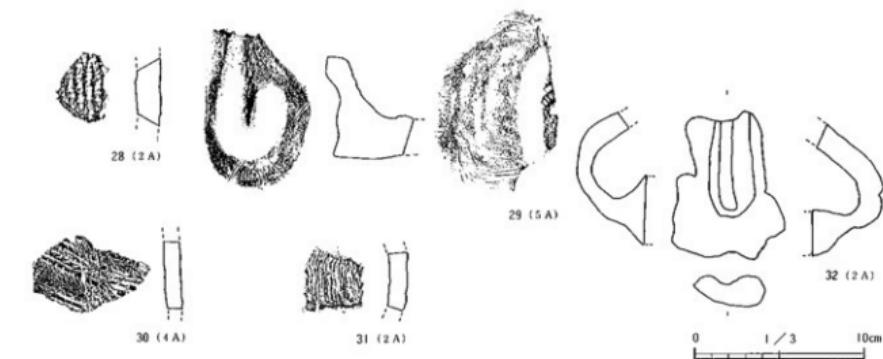


Fig.17 繩文土器 (2)・埴輪

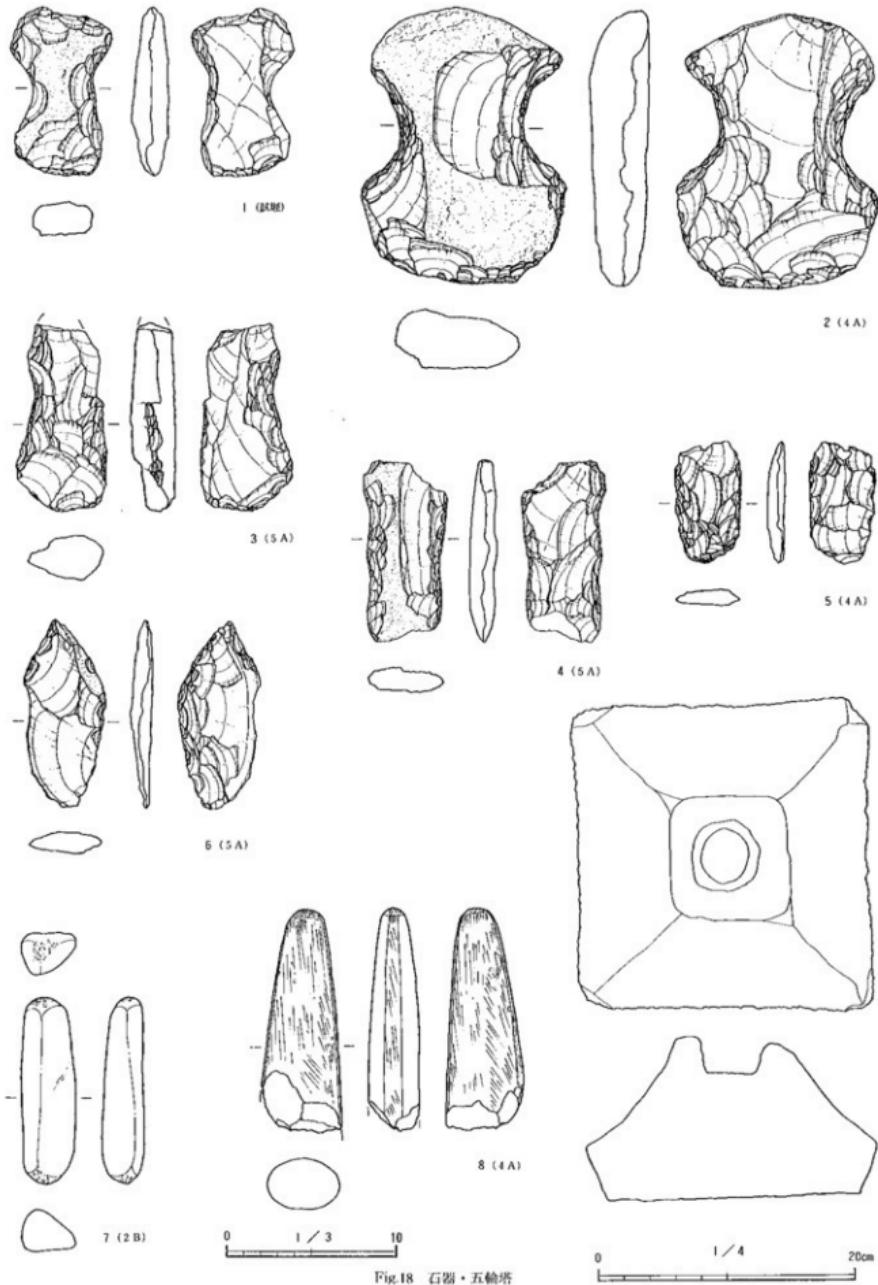


Fig.18 石器・五輪塔

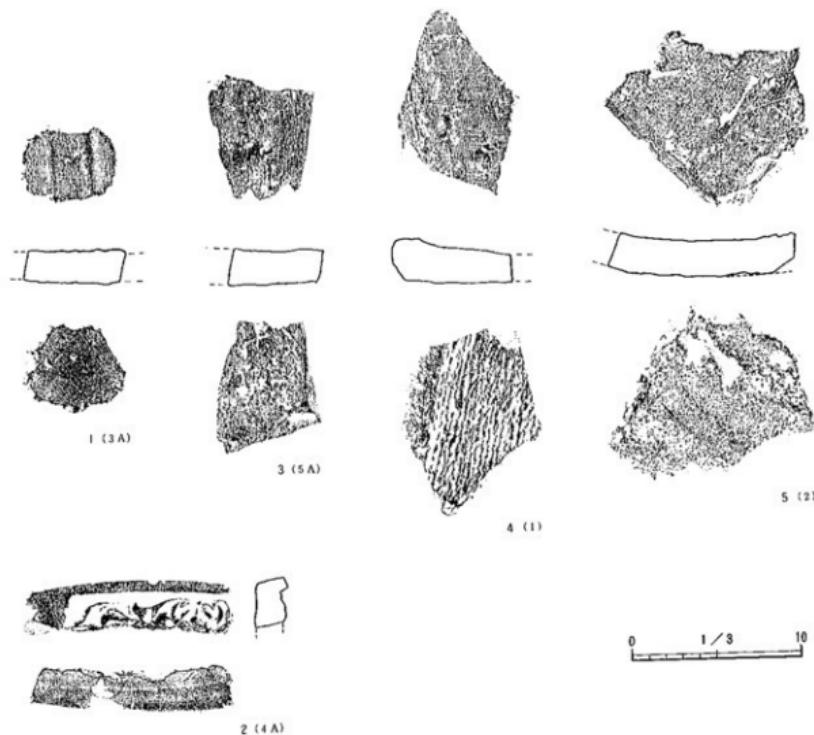


Fig.19 矯

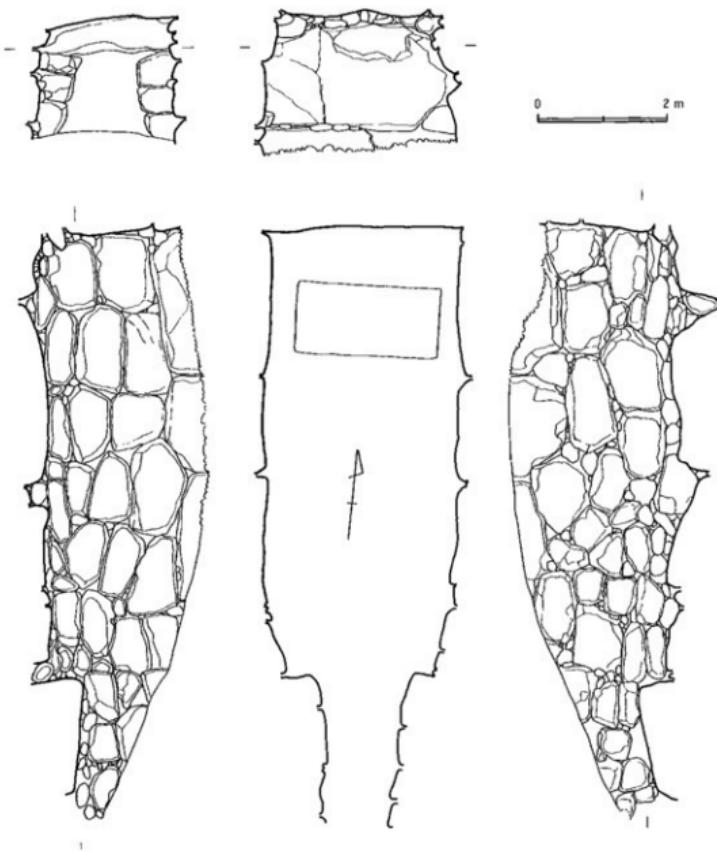
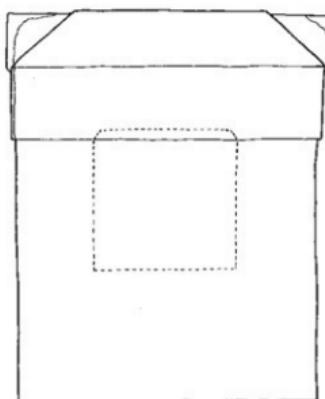
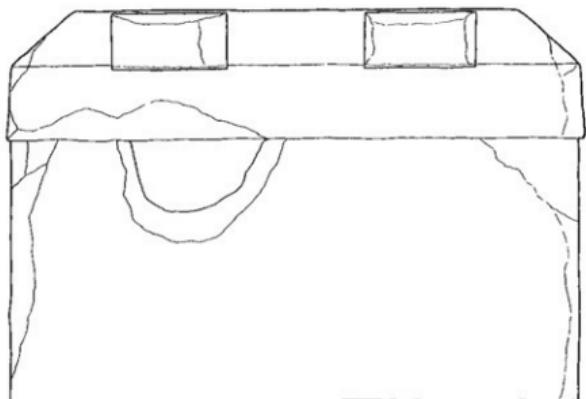
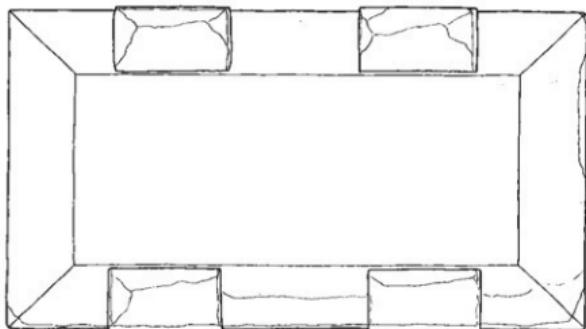
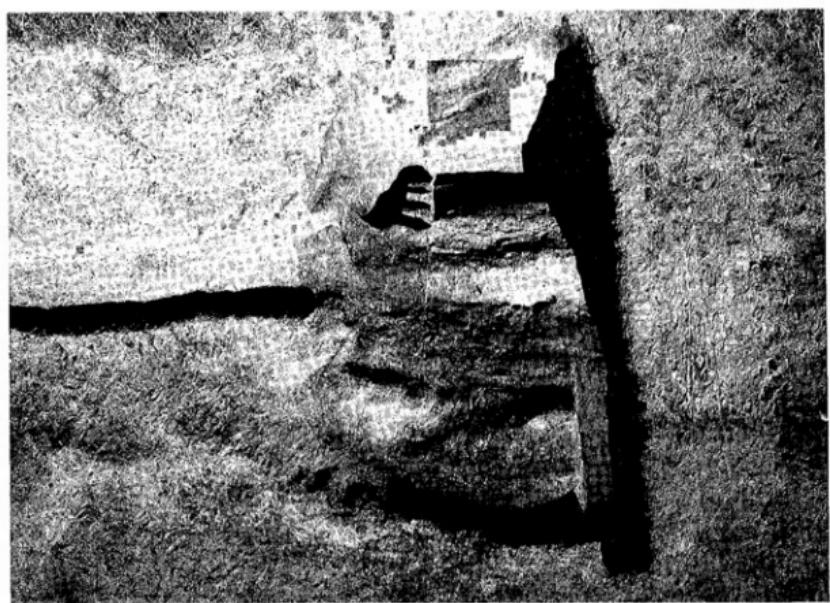


Fig.20 愛宕山古墳石室実測図（右島和夫氏提供）

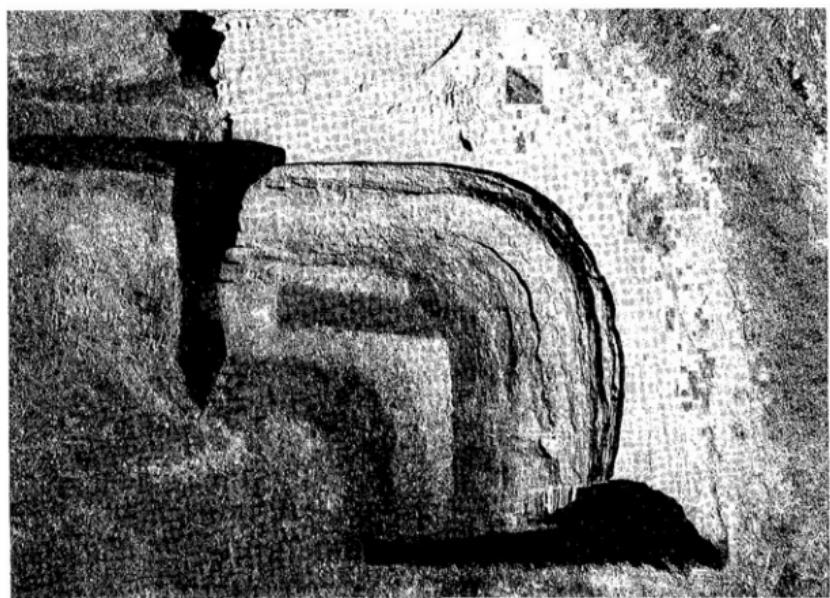


0 1 m

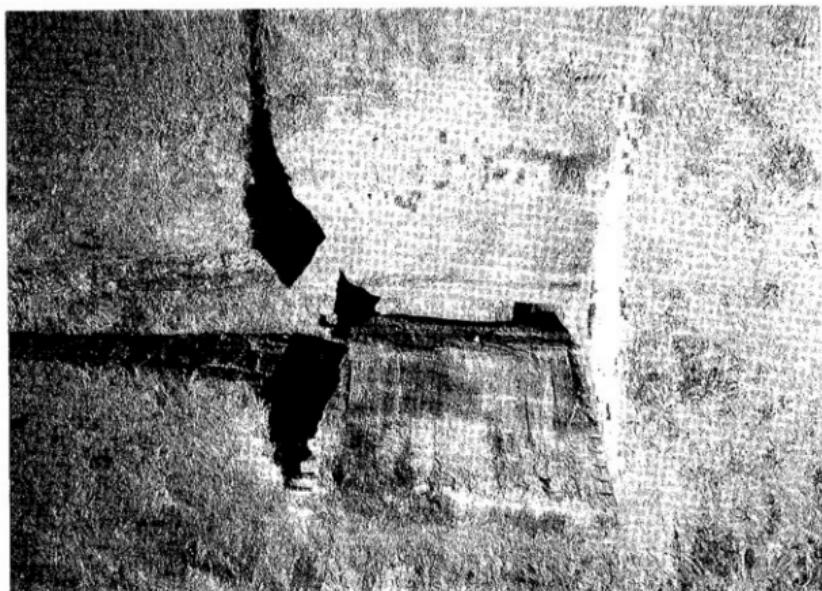
Fig.21 愛宕山古墳家形石棺実測図（右鳥和夫氏提供）



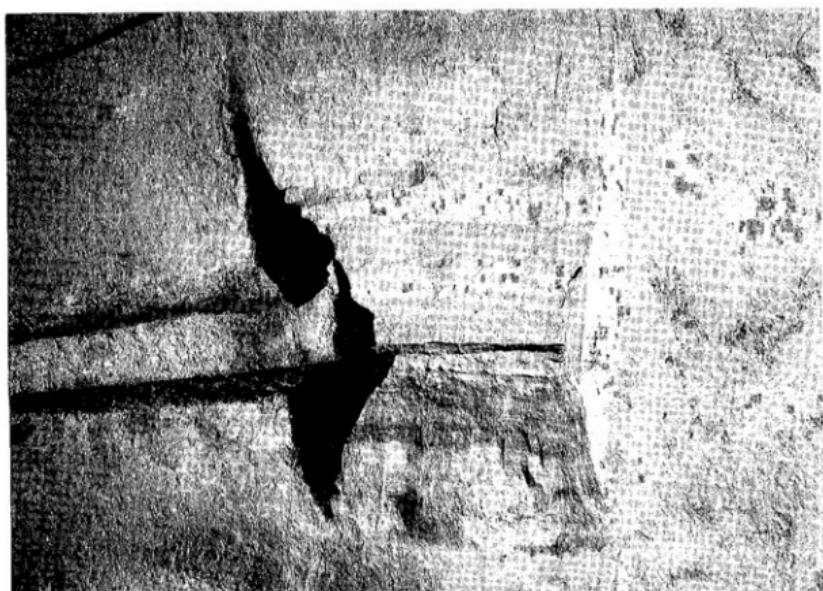
1. 1トレンチ全景（真上から）



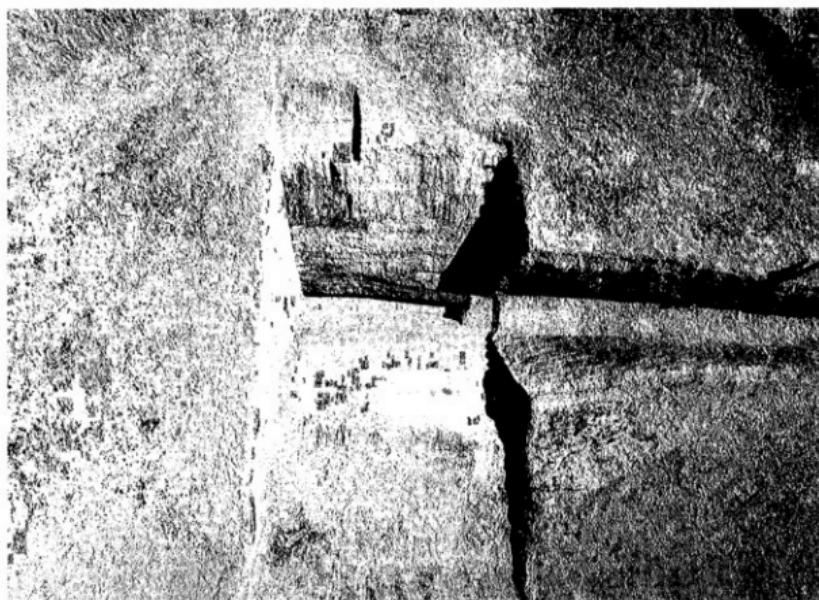
2. 2トレンチ全景（真上から）



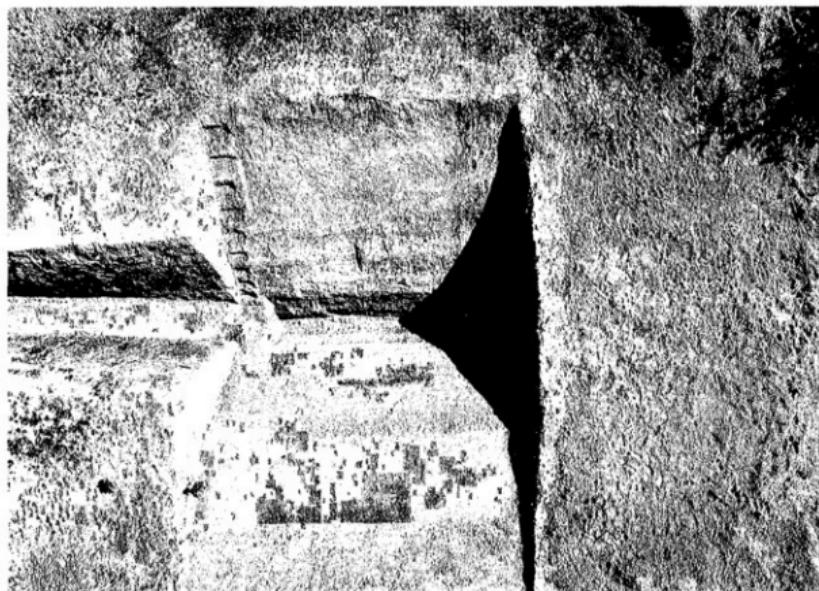
1. 3 トレンチ全景（真上から）



2. 4 トレンチ全景（真上から）



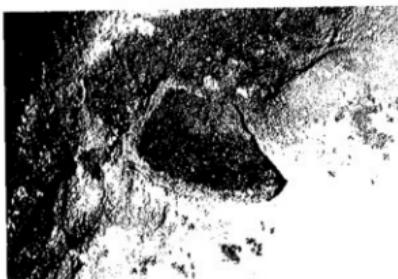
1. 5 トレンチ全景 (真上から)



2. 6 トレンチ全景 (真上から)



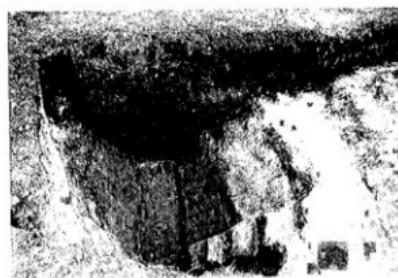
1. 女廻 3 A トレンチセクション (西から)



2. 女廻 3 A トレンチ遺物出土状態 (南から)



3. 1 トレンチ全景 (南から)



4. 1 トレンチ全景 (西から)



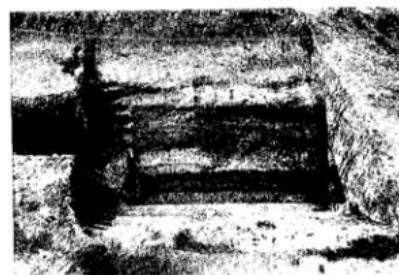
5. 2 トレンチ全景 (南東から)



6. 2 トレンチセクション (西から)



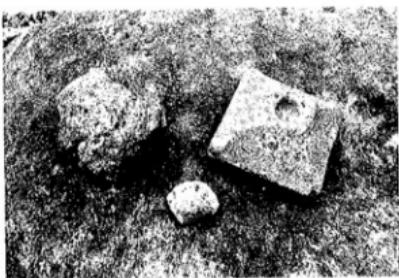
7. W-2 号溝セクション (南から)



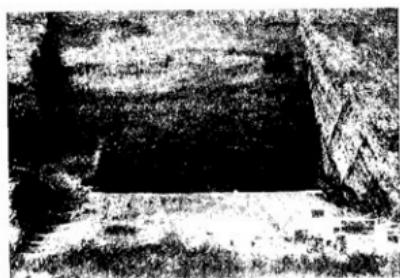
8. 3 トレンチ全景 (東から)



1. 3 トレンチセクション（南から）



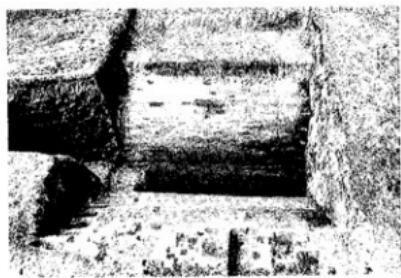
2. 3 トレンチ遺物出土状態（東から）



3. 4 トレンチ全景（東から）



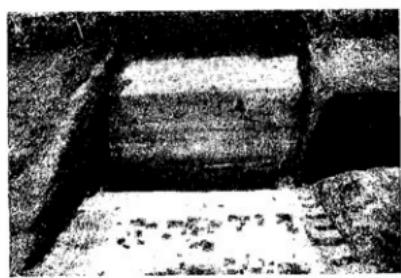
4. 4 トレンチセクション（南から）



5. 6 トレンチ全景（東から）



6. 5 トレンチセクション（南から）



7. 8 トレンチ全景（東から）



8. 6 トレンチ全景（北から）



1. 調査区全景（北より）



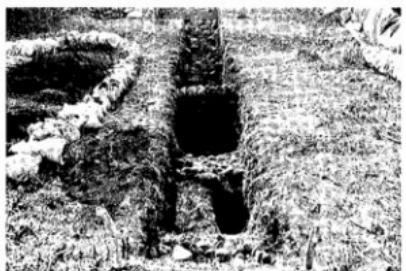
2. 爰宕山古墳全景（南西から）



1. 1 Aトレンチ全景（北西から）



2. 1 Aトレンチ葺石出土状態（西から）



3. 1 Aトレンチ石出土状態（東から）



4. 1 Aトレンチ柱穴セクション（東から）



5. 2 Aトレンチ全景（南から）



6. 2 Aトレンチ全景（北から）



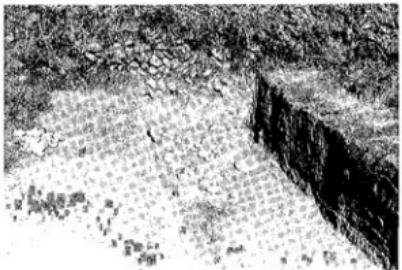
7. 2 Aトレンチ葺石出土状態（北から）



8. 2 Bトレンチ全景（南から）



1. 2 B トレンチ全景（北から）



2. 2 B トレンチ葺石出土状態（南から）



3. 2 B トレンチ石列出土状態（西から）



4. 2 B トレンチW-5号溝セクション（西から）



5. 3 A トレンチ全景（北から）



6. 3 A トレンチ葺石出土状態（北から）



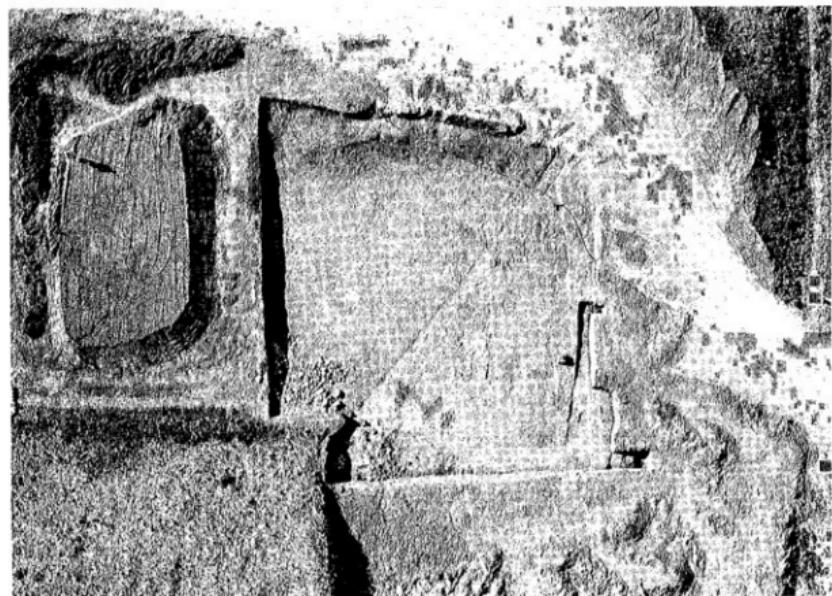
7. 3 A トレンチ葺石出土状態（北西から）



8. 4 A トレンチ遺物出土状態（西から）



1. 4Aトレンチ全景 (南西から)



2. 4Aトレンチ全景 (真上から)



1. 5 Aトレンチ全景（南西から）



2. 5 Aトレンチ全景（北東から）



3. 5 Aトレンチ葺石出土状態（西から）



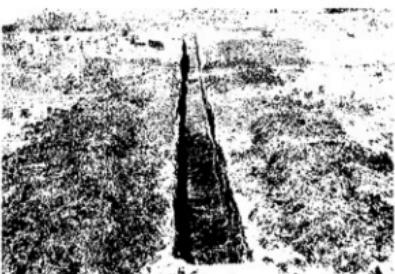
4. 5 Aトレンチの崩落した葺石



5. 4 Aトレンチ遺物出土状態（西から）



1. 5 Aトレンチ遺物出土状態



2. 6 Aトレンチ全景（南から）



3. 6 Aトレンチ全景（北から）



4. W-3号溝全景（南西から）



5. W-4号溝全景（西から）



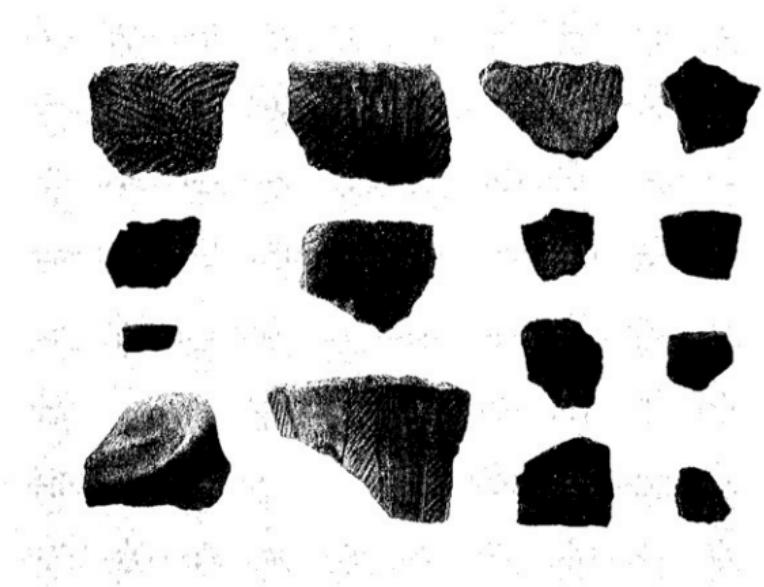
6. 愛宕山古墳石室入口（南から）



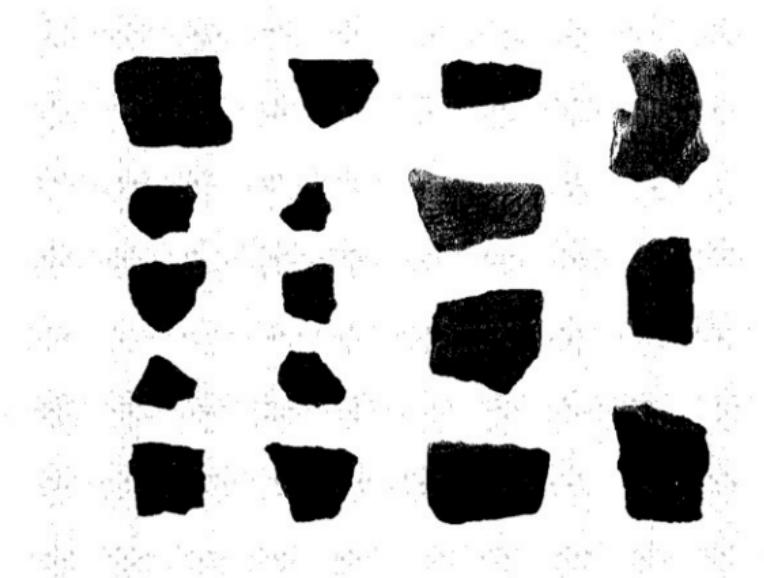
7. 愛宕山古墳石室（南から）



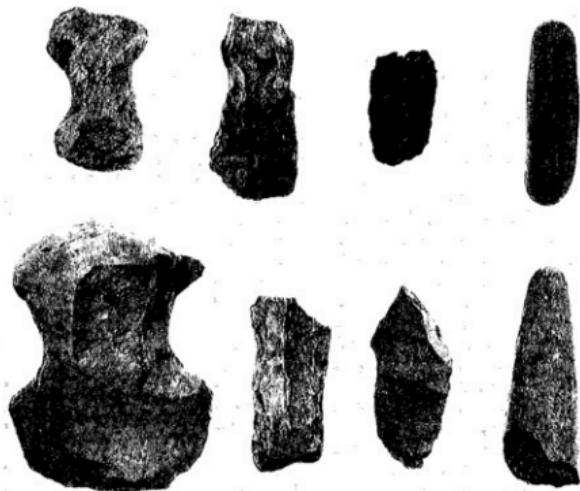
8. 調査を終えて



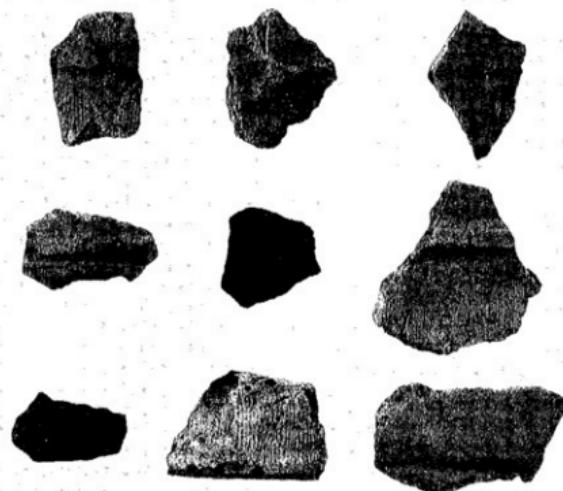
1. 绳文土器



2. 绳文土器



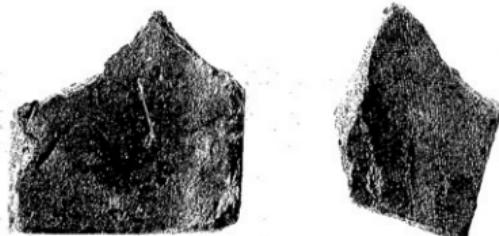
1. 石器



2. 研輪



1. 石塔



2. 瓦

## 抄 錄

フリガナ	ソウジャアタゴヤマイセキ
書名	總社愛宕山遺跡
副書名	前橋市立第六中学校移転新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第1巻
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	戸所慎策 吉田聖二
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371 群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	1996(平成8年3月25日)

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ソウジャアタゴヤマイセキ 總社愛宕山	前橋市總社町總社1762ほか	10201	7A74	36°24'24"	139°02'20"	19950908 ～ 19951222	5600m <sup>2</sup>	学校建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
總社愛宕山	古墳 堀	古墳時代終末期 江戸時代	古墳の周堀、溝 堀	土師器、須恵器、瓦、 網文土器、石塔、	遺物は遺構が埋まる時に混入 したもので、時代を決定でき るものではない。

## 総社愛宕山遺跡

平成8年3月18日 印刷

平成8年3月25日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市上泉町664-4

TEL 0272-31-9531

印刷 上海印刷工業株式会社